2-2.東海道を舞台にした信仰・祭礼等にみる歴史的風致

(1)はじめに

岡崎は、地理的に交通の要地として、矢作川（やはぎがわ）・乙川（おとがわ）の水運があり、また、古代からの主要街道である東海道と北へ上る足助（あすけ）街道（中馬（ちゅうま）街道、塩の道）、三河湾へと続く吉良道など多くの街道が交差している。とりわけ、東海道は岡崎の中心部を含み延長約 20 キロメートルと市域を南東から北西に貫く。中世より東西交通の要衝として宿が置かれ大いに賑わいをみせ、人、物、情報や文化の交流が活発に行われてきた。近世には城下町、宿場町、門前町が発達し、街道を通じて様々な民間信仰がもたらされ、街道沿いの町々では、秋葉信仰や牛頭（ごず）天王[1]信仰等の習俗・文化が根付き、民衆の間で広がり盛んとなった。東海道ゆえに各地の習俗・文化が根付いた祭礼等が各地域に起こり、今なお、地域住民らが清掃保護活動等により守り続けている松並木、一里塚、そして歴史的な風情が残るまちなみなど当時の面影を残す東海道を舞台に、大切に守り続けてきた祭礼等が形を変えつつも毎年行われ、歴史と伝統を今に伝えている。

(2)東海道の歴史

東海道は、江戸日本橋を起点とし京都の三条へと至る街道で、中山道・甲州道中・奥州道中・日光道中とともに江戸時代の五街道と称される。本市においては、古くからの街道としてもっとも市民に親しまれ、街道沿いにはその歴史を物語る史跡や建造物が数多く残されていて、歴史的と伝統・風情を感じさせる市街地を形成している。

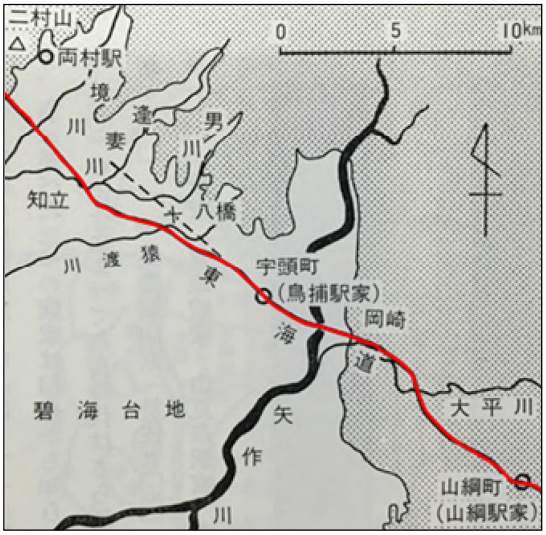


図2-2-1　古代三河の駅路

①古代

「東海道（うみつみち）」（『日本書紀』）と称される街道の形成は、大和政権が東方へと支配権を及ぼし始めた５、６世紀以降のことで、７世紀後半以後に次第に整備がなされていったと推定される。鳥捕（ととり・わしとり）（宇頭（うとう）町付近）・山綱（やまつな）（山綱町）を通るのが古代の東海道の大略の道筋と比定されている。

[1] 仏教における天部の一つ。京都東山祇園や播磨国広峰山に鎮座して祇園信仰の神（祇園神）ともされ現在の八坂神社にあたる感神院祇園社から勧請されて全国の祇園社、天王社で祀られた。

②中世

鎌倉幕府の成立によって東海道の性格は大きく変化する。２つの政権所在地を結ぶ道は、政治・軍事のみならず、経済・文化的にも国内最重要の幹線「京鎌倉往還」となった。『太平記』には、矢作川の渡河点が３箇所あったことをうかがわせる記述があり、東海道（鎌倉街道）もいくつかの道筋が推定されている。大永７年（1527）には菅生川（乙川）南岸の明大寺が岡崎で、東海道も同地を通っていたことが『宗長手記』で確認できる。道筋が菅生川（乙川）北岸に移るのは16世紀末の岡崎城主・田中吉政時代である。

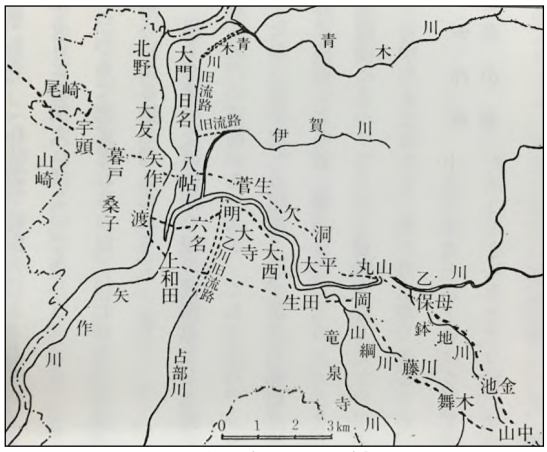


図2-2-2　中世の東海道（鎌倉街道）推定図

③近世

慶長６年（1601）、徳川家康公が開いた江戸幕府によって、東海道はいわゆる五街道の第一として、江戸と京を結ぶ宿駅制度が定められ、幕藩体制を支える大動脈となった。これにより、東海道の江戸品川宿から藤川は37番目、岡崎は38番目の宿となった。岡崎藩主・本多康重が慶長14年（1609）に水害で疲弊した八町村の町人を城東の台地上に移して伝馬町を新設し、ほぼ道筋は固定した。城下廻り以外の市域での道筋は、天正10年（1582）に甲斐から凱旋する織田信長のために家康公が道路改修を行っているので、それらを整備して近世の道筋が固定したのであろう。以後、文化３年（1806）の『東海道分間延絵図』、天保14年（1843）の『東海道宿村大概帳』により道筋をたどってみると、次のとおりである。本宿村・山綱村・舞木村・加宿市場村・藤川宿までは断層に沿った谷筋を東海道が東西に走っている。本宿村内には家数110軒、山綱村内の道幅は２間半から３間半で家数は９軒のみであった。舞木村内の道幅は２間半から３間半で家並は全長１町[2]の道を西進する。続いて広義の藤川宿の東入口となる加宿市場村に至り、東町・中町・西町・一里山の順に藤川宿内の道幅２間半で全長36町５間となっている。宿はずれの松並木を過ぎると岡村地内に入る。岡・生田両村地内の東海道は山綱川・竜泉寺川・乙川の各氾濫原地帯をやや北東方向に進行する。家並は岡村が４町16間、生田村が３町29間であった。大平川（乙川）の板橋・大平橋を渡って大平村・西大平村に至る。絵図でみると、西大平藩大岡陣屋東番所までの家数は東西で46軒の百姓家が確認できる。西大平村に入る直前で東海道は南北から東西に方向を変えている。西大平村は１万石大岡家の陣屋所在地にふさわしく南北両側に58軒が家並を形成していた。西大平藩陣屋の近

[2] 町（ちょう）＝60間＝約108メートルの長さ。

くに大平の一里塚が左右榎木立として描かれ、家並が若干続くと南側に西大平藩西番所に至る。西番所から松並木を過ぎると更沙川の筋違橋の右端に「従是岡崎領分」の石碑が立ち、岡崎領欠（かけ）村となる。欠村は広義の岡崎宿の東入口である。投（なぐり）町から始まり両町・伝馬町・籠田町・連尺町等を通過して、「町数５町４間 27 曲」の屈曲した宿場兼城下町を材木町・下肴町・田町・板屋町で西の総門を出て、伊賀川の松葉橋・早川の亀屋橋を渡り終えて岡崎町廻りが終了する。矢作村内の道幅は４間と広く、往還全長は 14 町 35 間で家数は 250 軒以上であったから、藤川宿よりも往還通りの家数は多かった。

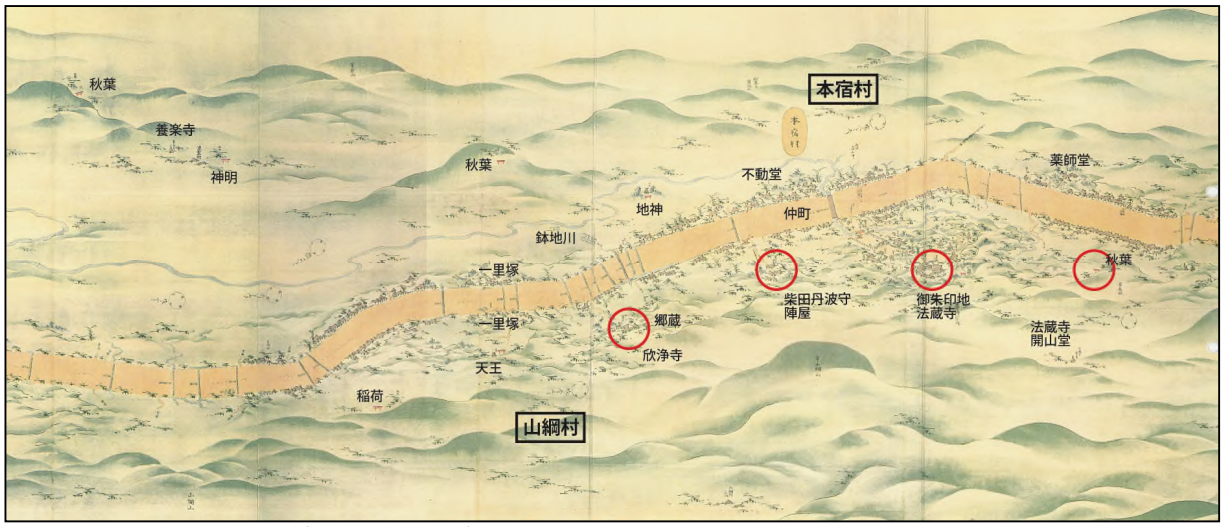


図2-2-3　東海道分間延絵図(本宿村・山綱村)※赤丸内は現存社寺等

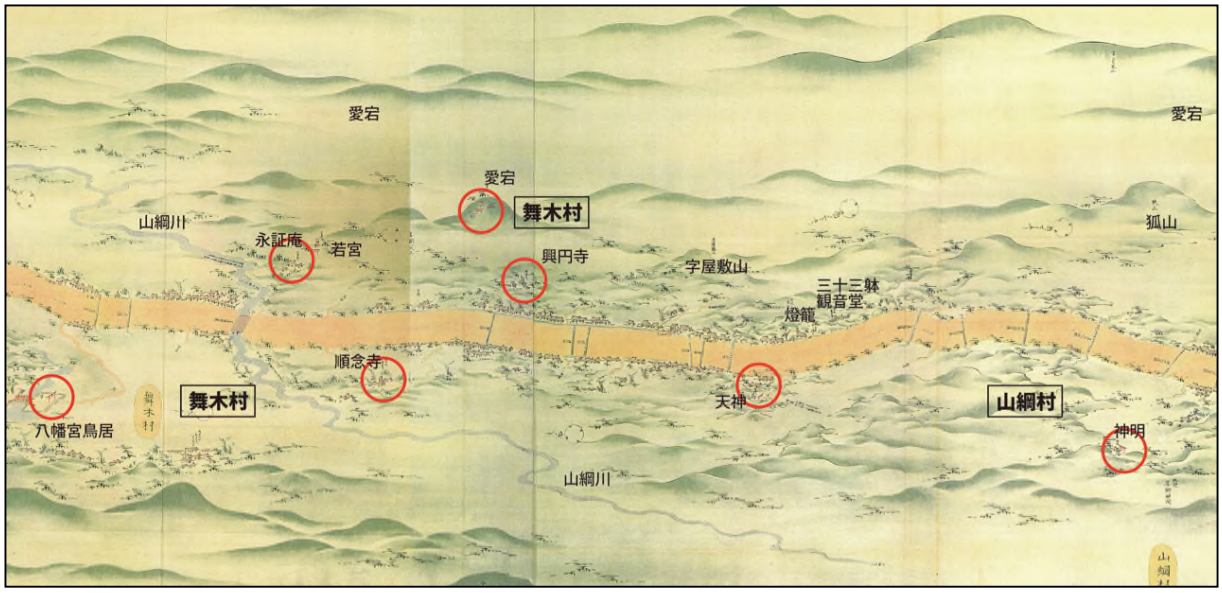
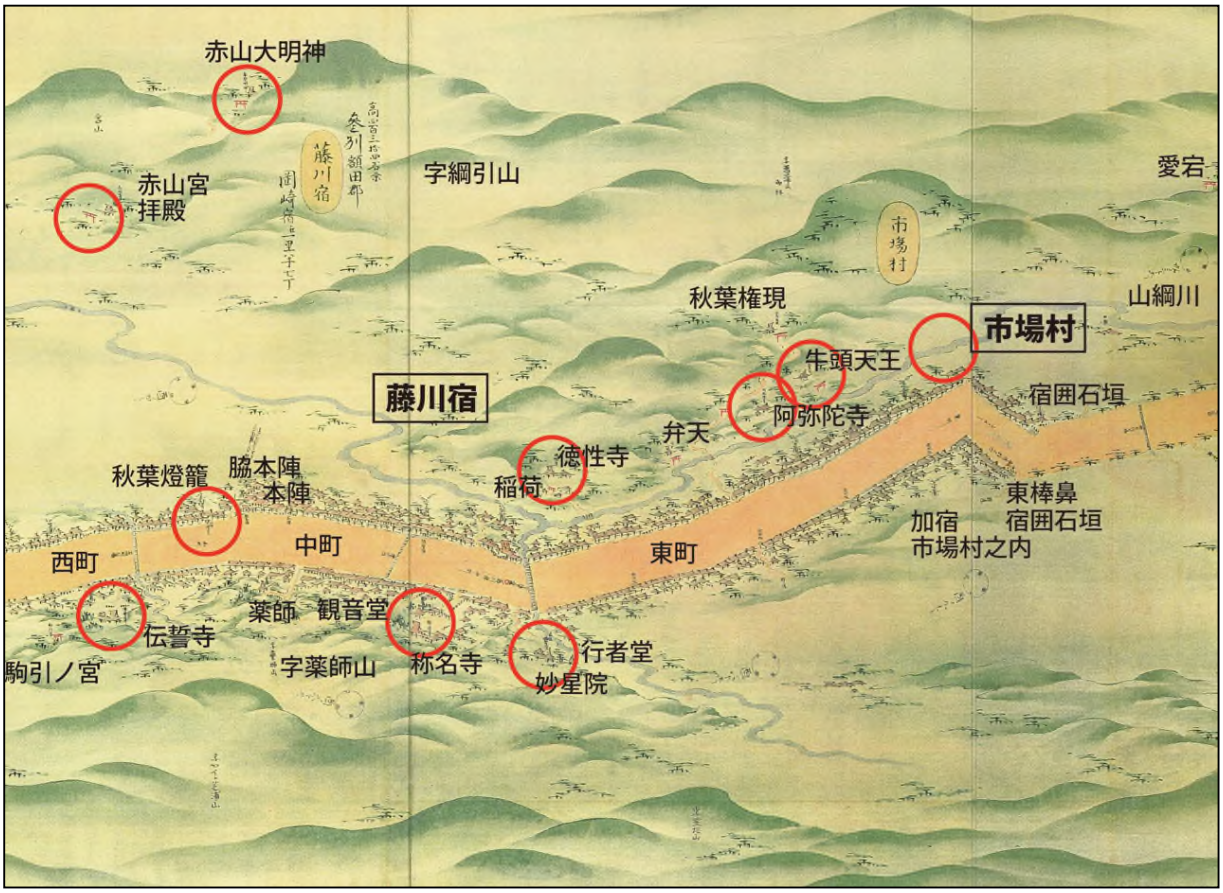


図2-2-4　東海道分間延絵図(山綱村・舞木村)※赤丸内は現存社寺等



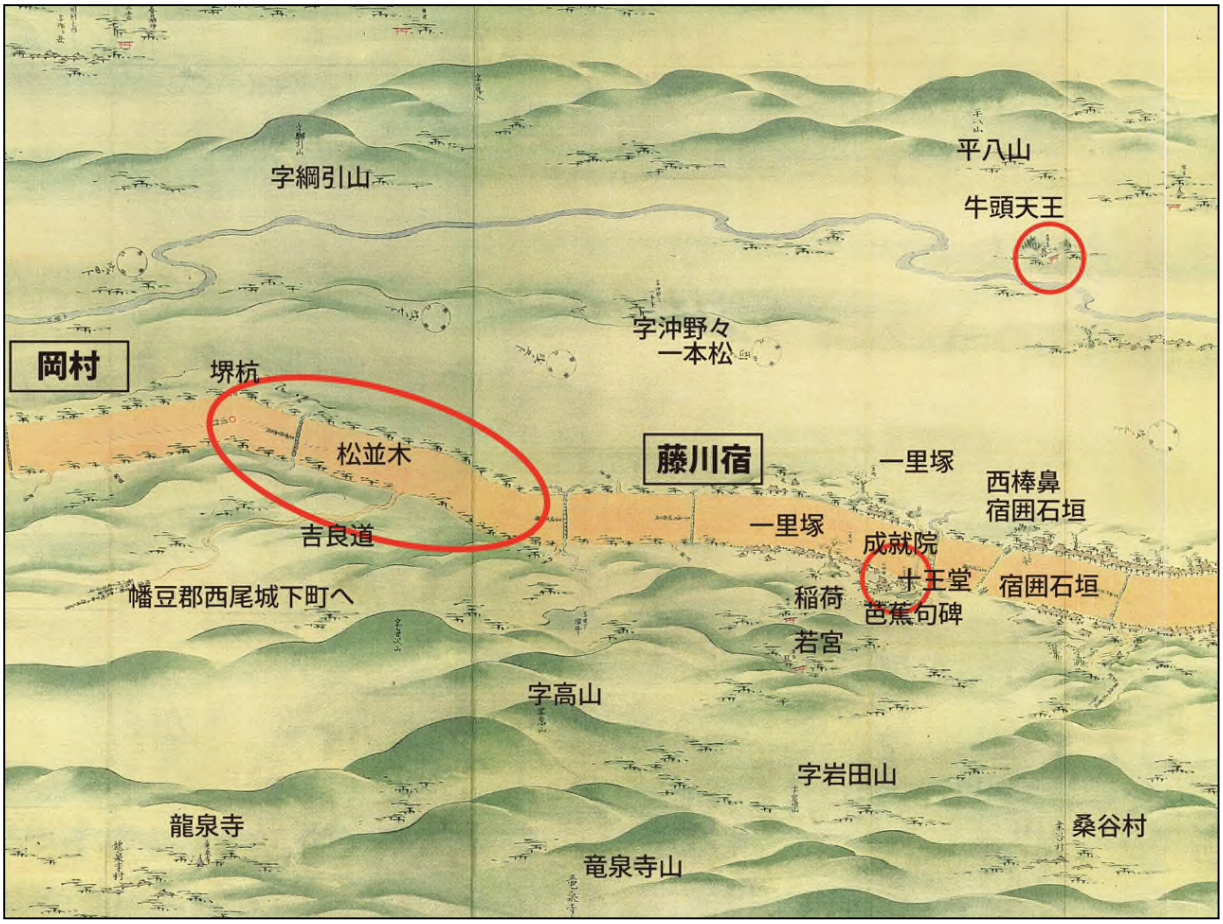


図2-2-5　東海道分間延絵図(藤川宿)※赤丸内は現存社寺等

図2-2-6　東海道分間延絵図(岡村・生田村)※赤丸内は現存社寺等

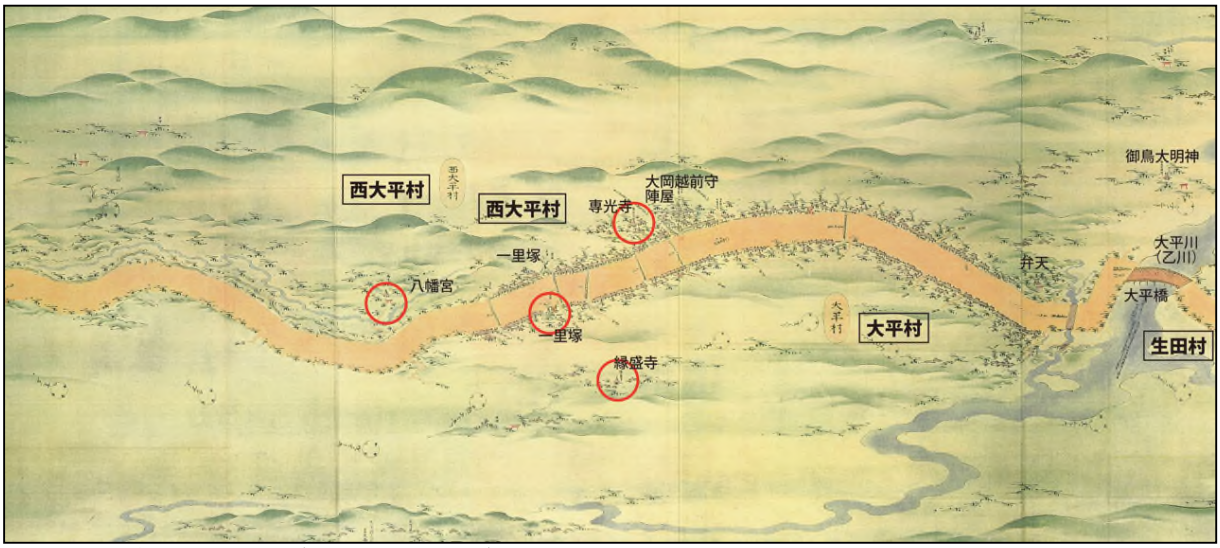


図2-2-7　東海道分間延絵図(生田村・西大平村)※赤丸内は現存社寺等

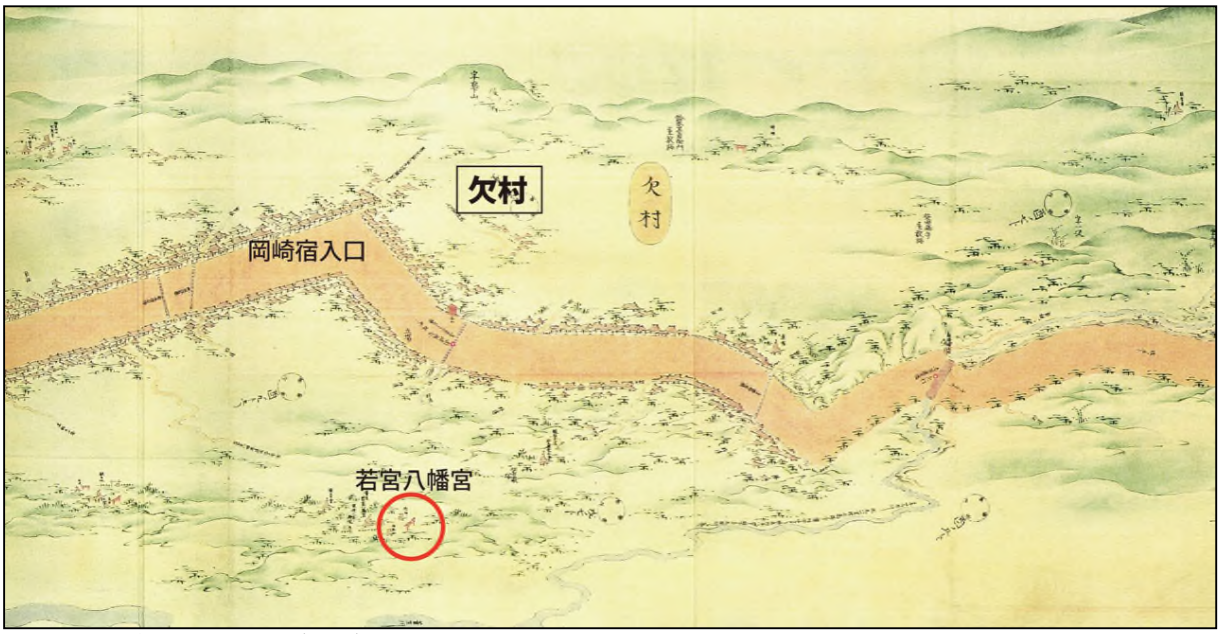


図2-2-8　東海道分間延絵図(欠村)※赤丸内は現存社寺等

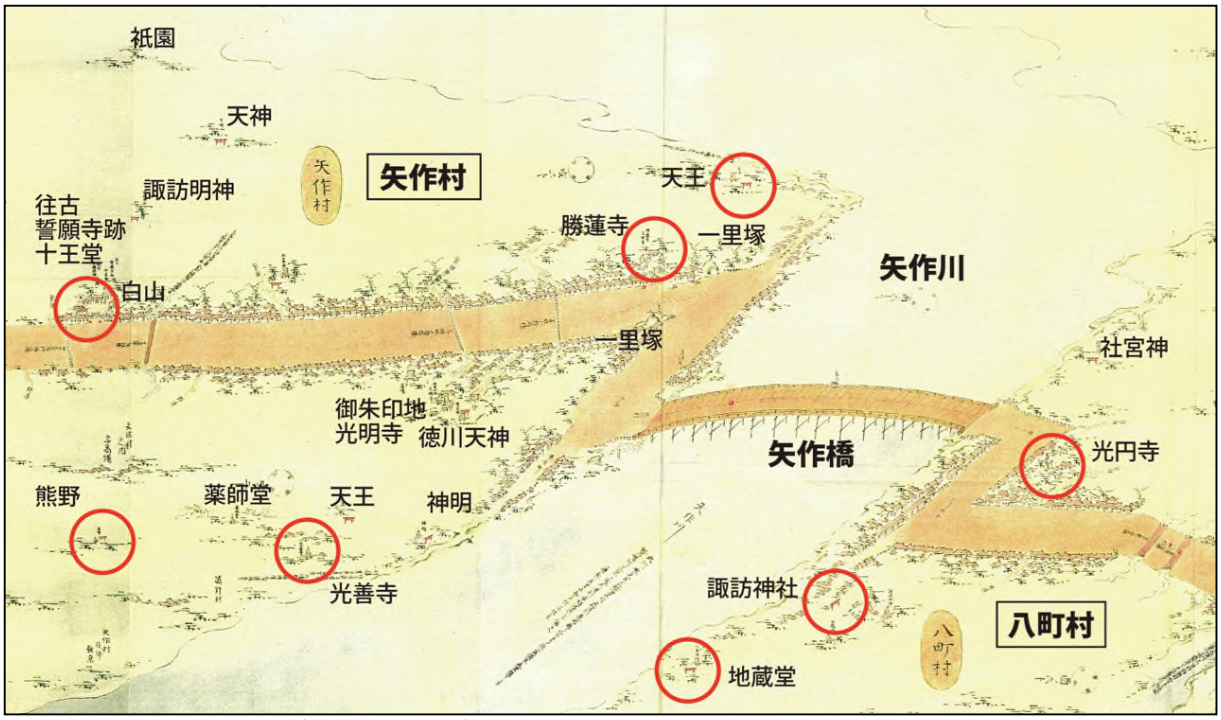


図2-2-9　東海道分間延絵図(八町村・矢作村)※赤丸内は現存社寺等

④近現代

近代に入ると東海道に代わって鉄道が主役となり、東海道の役割も変化した。大正期に入ると自動車の発達により国道の整備・改修が進められた。市内を通る東海道は、曲折が多く、繁華街を通る部分は道幅が狭く、拡幅が困難なこと、経費が高くつくことなどから、新国道は、東海道とは別の道筋がとられた。戦時中は整備・改修を一時中止、未開通区間は昔の東海道のままであった。戦後、本宿・矢作地区の整備が昭和31年(1956)に完了し、ここに旧東海道の幹線道路としての役割は国道1号に変わった。東海道と並行して新道が建設された部分、本宿・舞木・市場・藤川・美合(みあい)・大平・矢作の各町等は、社寺や歴史的建造物が残るまちなみとなっている。これに比べて、並行する新道が作られなかった部分は、まちなみとしての歴史は古く記録も残るものの、現在は交通量が多い幹線道路となっている。しかし、歴史的な場所として東海道沿いのまちなみの中では重要な地点であることには変わりがない。旧道は現在も生活道路として利用されており、道筋に変更はあるが、昔の街道筋をたどることができる。藤川・美合・大平の各町等には現在も松並木が残っており、東海道の面影を残している。

(3)秋葉信仰と秋葉山常夜燈

①秋葉信仰

江戸時代には街道を通じて様々な民間信仰がもたらされ、伊勢信仰や秋葉信仰が民衆の間で広がっていった。三河地域においては、特に秋葉信仰が盛んで、現在も街道沿いの町や村の中心及び街道の三叉路等に建立された常夜燈が現存しており、町内会等・講[3]により祭礼が連綿と続き、信仰の対象となっているほか、現在も町内会組織等を通じて秋葉山の御札を代参により毎年求め、台所等で祀る風習が東海道沿いを中心に市内全域に広がっている。

遠州秋葉山(浜松市)に発する秋葉信仰は、修験者三尺坊が神仏混淆(こんこう)の秋葉三尺坊大権現として祀られるようになり、火の神を祀ることから民間では火伏(ひぶせ)の神として信仰されてきた。貞享２年(1685)にこの三尺坊像を御輿に担ぎ、西は伊勢国関・坂下へ、東は島田・藤枝まで村送りをした「貞享の秋葉祭」により東海道筋に秋葉信仰が一気に広まった。以降、天明期(1781～1789)に京都の大火事、浅間山の噴火、大飢饉と災害が相次いだため、秋葉信仰が一層盛んになり、町・集落や同業者有志で講が結成され、秋葉山遥拝(ようはい)のために常夜燈が建てられたとされる。特に、関東・中部地方を中心に、各地で秋葉講が組織され参詣することが流行した。さらに慶応３年(1867)の「ええじゃないか」では、秋葉山おかげ参りが発生したり、各地の秋葉社や常夜燈で秋葉祭が催された。

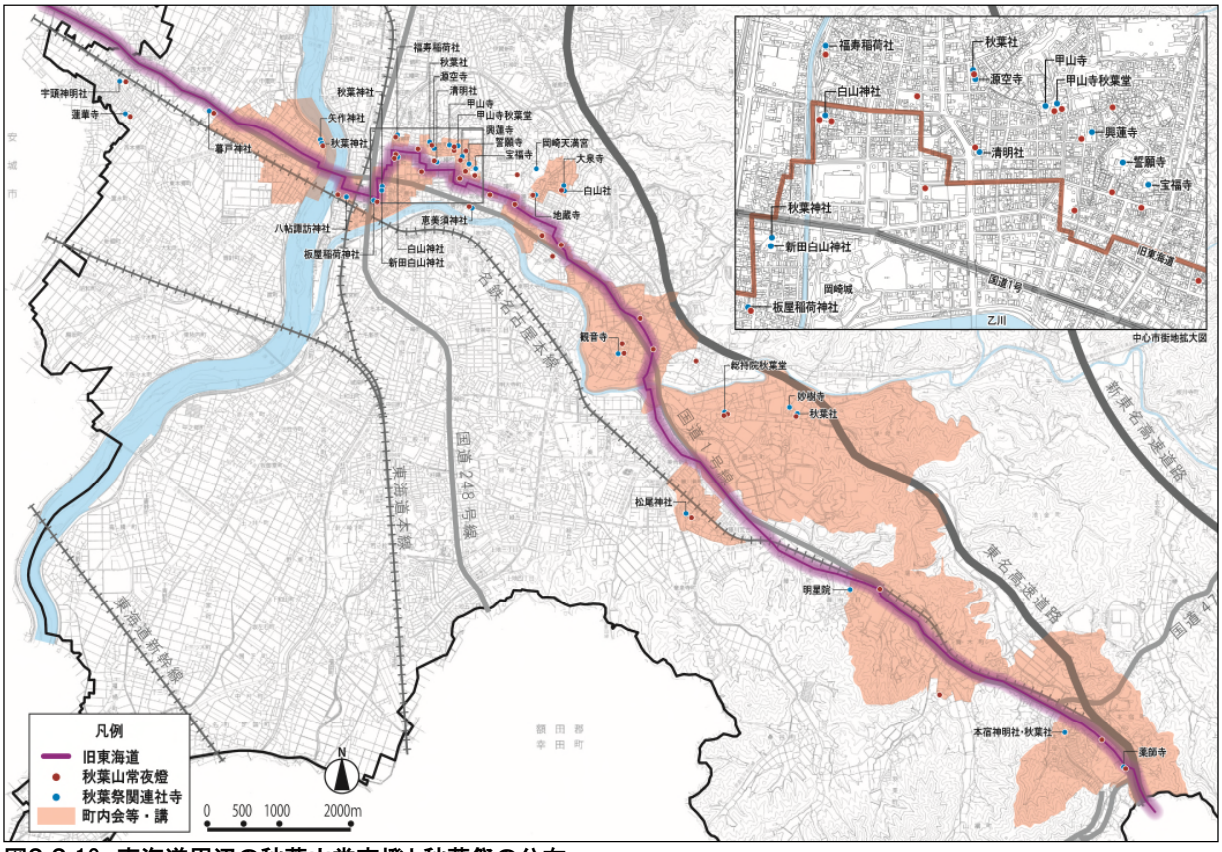


図2-2-10　東海道周辺の秋葉山常夜燈と秋葉祭の分布

[3] 江戸時代の庶民にとって秋葉山へ参詣するには多額の旅費がかかり、経済的負担が大きかった。そのため、秋葉講という互助組織を結成し、毎年交代で選出された講員が積み立てた旅費を使い、組織の代表として秋葉山へ参詣していた。

岡崎でも地縁組織を中心に講組織が結成され、秋葉山常夜燈を建て、代表者が東海道や脇街道を通り遠州秋葉山へ代参して御札を貰い受けてきた。寛政５年(1793)の岡崎からの参詣記である『秋葉山道中記』(伊藤家文書)には、行路として東海道を東に進み浜松から北上し、秋葉大権現にて祈祷と札を受け、帰路は山道部の道を西に進み鳳来寺を参詣して南下し、御油(豊川市)から東海道沿いに戻るコースが記されている。

伝馬町の記録(杉山家文書)には、秋葉講は明治時代まで「寛政講」と呼ばれ、享和２年(1802)には、秋葉山にて大札３枚、御姿３枚、火防の札 30 枚を受け、講仲間の初穂料 100 疋を納めていたことが記されている。享和・文化年間(1801～1817)には毎年１月、５月、９月に２人ずつ遠州秋葉山に参詣していることが記され、大札は常夜燈の祠等に納められ、火防の札は各戸へ配布されたと考えられる。

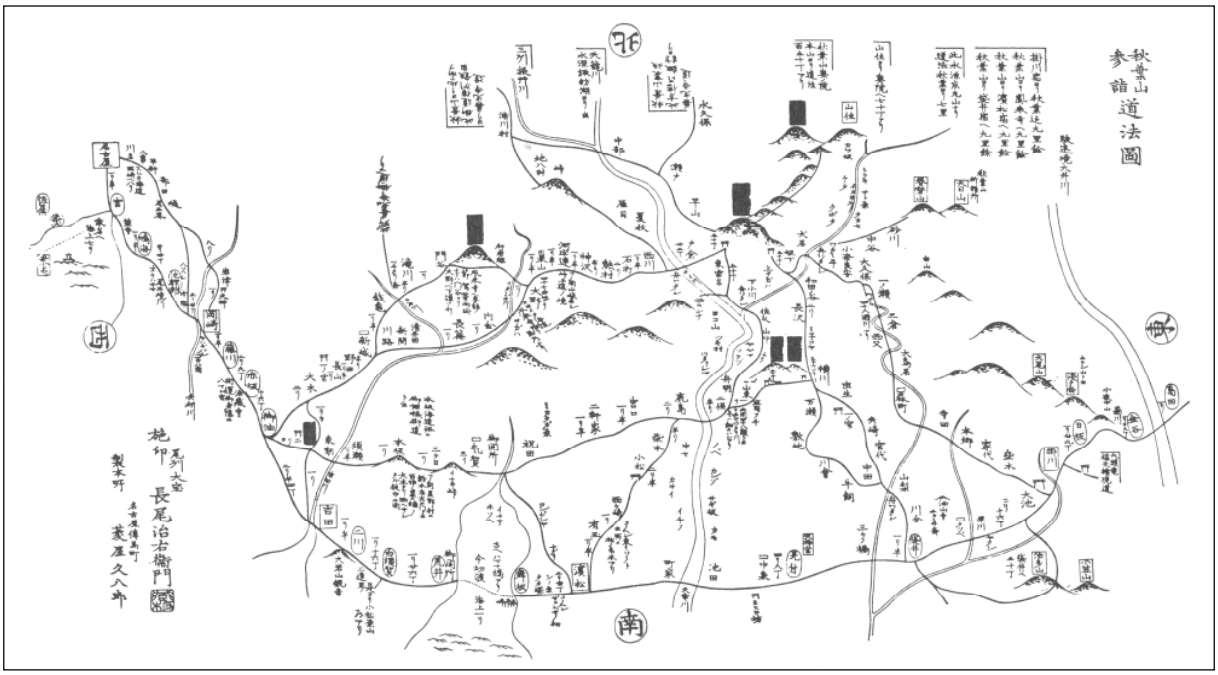


図2-2-11　秋葉山参詣道法図(杉山家文書)

②秋葉山常夜燈

岡崎における秋葉信仰の始まりは、延享元年(1744)建立の甲山寺多宝坊の秋葉三尺坊(明治14 年(1881)に極楽坊へ移築)に端を発し、秋葉大権現燈籠が延享４年(1747)に建立されている。

岡崎城下の秋葉山常夜燈について、江戸時代に記された『三河聡視録』には、「秋葉山常夜燈、寛政二年庚戌冬十二月より初めて町々に建立せり」とある。秋葉講による単立の秋葉山常夜燈は寛政２年(1790)の両町のものを筆頭に、建立

図2-2-12　甲山寺秋葉堂と秋葉大権現燈籠

が流行するのは、各地域の民衆に信仰が浸透した江戸時代後期の寛政期(1789～1801)で、この時期の常夜燈は、両町、板屋町、籠田町等の城下町や東海道沿いに多い。建立地は、街道沿いの町や村の中心地となる道の三叉路、辻、寺の門前等である。中には、方角、行き先を刻み、道標としての役割を果たしていたものがあることもその建立地の特徴を示している。こうした常夜燈は、近世に建立されたもののうち約半分が文化・文政期(1804～1830)に建立されている。寛政期によく見られた「講中安全」の銘文がなくなり、「村中安全」「町内安全」等の銘文が多くなることから、秋葉信仰が講仲間の信仰から町や村の信仰として浸透定着したことを物語っている。現在でも、秋葉山常夜燈の建つ町の多くでは、講があり御札を受ける代参が行われ、市街地では本山で受けてきた御札を祀る祠が付随する例も多い。

図2-2-13　秋葉山常夜燈(籠田町)

図2-2-14　秋葉山常夜燈(花崗町)

秋葉山常夜燈は、市内では現存で 120 基を数え、ほぼ全てが花崗岩製である。本市は良質な花崗岩が産出し、茨城県桜川市真壁、香川県高松市庵治町(あじちょう)と並んで石の三大産地のひとつに数えられている。特に、墓石や灯籠、彫刻を始めとする石製品は、伝統に培われた品質と技術の高さで日本一を誇り、「石都岡崎」と称されている。江戸時代には、岡崎の石製品を諸大名が徳川家ゆかりの寺社に競って奉納したほか、秋葉信仰を背景とした町や村による常夜燈の建立も盛んに行われ、文化・文政期(1804～1830)に最盛期となった。常夜燈に石工銘が刻まれているものは少数であるが、作者が判明しているものには岡崎の石工が多い。それらは規模が大きく優美で、石材も硬質なため保存状態の良いものが多く、市街地の中において、現在も街道筋の歴史文化や近世の町と村の中心地を今に伝える重要な建造物の一つとなっている。

表2-2-1　秋葉山常夜燈の所在地及び建立年代

所在地	建立時代	所在地	建立時代
本宿町	寛政年間(1789～1800)	梅園町	文政 11 年(1828)
本宿町	寛政 13 年(1801)	籠田町	寛政 10 年(1798)
舞木町	文化 10 年(1813)	亀井町	天保 15 年(1844)
市場町	寛政 7 年(1795)	六供町	嘉永 6 年(1853)
蓑川町	文政 10 年(1827)	六供町	延享 4 年(1747)
保母町	天保 12 年(1841)	六供町	寛延 3 年(1750)
岡町	万延 1 年(1860)	六供町	明治 12 年(1879)
丸山町	大正 13 年(1924)	本町	文化 3 年(1806)
大平町	弘化 4 年(1847)	康生通	昭和 53 年(1978)
大平町	文化 7 年(1810)	材木町	寛政 10 年(1798)
大平町	明治 16 年(1883)	東能見町	嘉永 4 年(1851)
大平町	昭和 9 年(1934)	東能見町	年代不詳
欠町	文政 13 年(1830)	福寿町	天保 11 年(1840)
栄町	昭和 8 年(1933)	魚町	天保 4 年(1833)
朝日町	大正 15 年(1926)	魚町	天保 4 年(1833)
両町	寛政 2 年(1790)	板屋町	寛政 9 年(1797)
中町	弘化 4 年(1847)	八帖町	寛政 10 年(1798)
中町	明治 11 年(1878)	八帖町	享和 3 年(1803)
中町	明治 13 年(1880)	八帖町	安政 4 年(1857)
伝馬通	享和 3 年(1803)	矢作町	年代不詳
島町	嘉永 2 年(1849)	暮戸町	明治 35 年(1902)
花崗町	文化 10 年(1813)	西本郷町	天保 2 年(1831)
花崗町	昭和 49 年(1974)	宇頭町	明治 28 年(1895)

③秋葉祭

東海道を中心に広がっている秋葉信仰の祭礼は、秋葉祭と呼ばれることが多い。各町内会等・講で年に１度、年行事等の代表者が代参し受けてきた御札を秋葉山常夜燈や秋葉社へ納め、町の人々が集まり僧侶・神主の祈祷を受けるものと、寺院の秋葉堂において秋葉山大祭として三尺坊命日にあたる 11 月 16 日又はその前後の日に祈祷や火渡りを行うものがある。

ア.秋葉山常夜燈と秋葉社での秋葉祭

秋葉社での秋葉祭として、東部の本宿町では、毎年 11 月中旬に氏子町の世話役が約 620 枚の御札を代参で受け、大正２年(1913)に氏神である本宿神明社に合祀された秋葉社で、大晦日に除夜祭りとともに秋葉祭を行っている。昭和 30 年(1955)頃までは燈明番があり各常夜燈に火が灯されていた。

東海道沿いの秋葉山常夜燈での秋葉祭としては、常夜燈建立後、祭礼が連綿と行われ続けている町内会等・講がある。現在の祭りの形態としては、毎年、あらかじめ各組織の世話役

等が秋葉山に代参し御札を受けて、秋葉山常夜燈で祭礼を行っている。大平東町では常夜燈（文化４年（1807）建立）に消防団の詰所と火の見櫓が隣接し、５月４日の祭礼日に秋葉講の旗と紅白幕、祭壇を飾り、注連縄（しめなわ）で御札を取り付け１年の安全を祈願している。

旧城下より東海道を東へ向かった欠町では、常夜燈（文政 13 年（1830）建立）が街道脇に建ち、11 月中旬に常夜燈に幟を立て、近隣の町公民館で祭壇を設け住職の祈祷を受ける。

東海道沿いの岡崎城下で石屋町として栄えた花崗（みかげ）町では、11 月中旬の日曜日に、石工の技を極めた龍の彫刻が施された大型の常夜燈（文化 10 年（1813）建立）に隣接する公民館で、町内の人々が供物を供え祭礼を行っている。

図2-2-15　秋葉山常夜燈（大平辻中）

同じく城下であった籠田町では、11 月 16 日前の日曜日に御札と各自持ち寄ったお神酒、菓子、果物等の供物を常夜燈（寛政 10 年（1798）建立）の前にしつらえた祭壇に供え、町内の人々が神社宮司のお祓いにより祭礼を行っている。御札は供物と共に各戸へ配られる。代参や祭礼の準備は、当番となる年行事等が取り仕切っている。

同じく城下であった能見通（のみどおり）では、11 月に御旗（みはた）公園（材木町）角の常夜燈（寛政 10 年（1798）建立）前に祭壇を設けて紅白幕を引き、受けてきた御札を祠に納めて１年の息災を祈っている。世話役のほか子ども達も含め 30 名ほどが参加をしている。

イ.秋葉堂での秋葉山大祭

岡町の総寺院は、「岡の三尺坊」「男川（おとがわ）三尺坊」と呼ばれる享保３年（1718）開創の曹洞宗寺院で、境内には慶応元年（1868）再建、大正６～７年（1917～1918）に改修された本堂、文久年間（1861～1864）に建立された秋葉堂が並び建つ。

寺所蔵の『三尺坊略縁記』によると、秋葉山大祭は文久年間より寺院鎮守の秋葉大権現の大祭として始められ、現在も続いている。同じく文久年間より始められた火渡りは昭和 50 年代から休止していたが、平成 22 年（2010）より再開された。

図2-2-16　総持院秋葉堂と常夜燈

図2-2-17　秋葉山大祭　火おこし

図2-2-18　秋葉山大祭　火渡り

現在は、12 月第２又は第３日曜日（17 日に近い日曜日）に行われ、大祭当日は、午後１時より夕刻まで堂内の丈３尺の三尺坊本尊に般若心経等の祈祷があげられ、読経と鈴の音が参道に響き渡る。宵闇につつまれ空気の冴えわたる午後６時頃、堂前に現れた行者（ぎょうじゃ）達が２基の常夜燈（万延年間（1860～1861）建立）との間に白砂が敷かれ注連縄で結界された周囲を回り祈祷し神火を起こす。大きな火が境内と参拝者を照らし、火の粉が天へと舞う。その火を鎮め、先達の行者が炎の間を渡ると町内外の老若男女の参拝者も次々と素足で火渡りをし、一年の厄を落とし無病息災を祈る。

また、岡崎城下であった六供（ろっく）町の甲山寺秋葉堂では毎年 11 月 16 日に大祭として大護摩が焚（た）かれ、信徒を始め多くの参拝者が祈祷を受けた御札を持ち帰る。

このように、市街地の中にあって、東海道沿いを中心に広がっている秋葉信仰の風習や祭礼は、現在も秋葉山常夜燈や社寺を舞台に、各町内会等・講に連綿と受け継がれており、江戸時代以来の防火と地域の安全を祈る伝統行事が毎年行われている。「講内安全」「町内安全」と記された常夜燈には、東海道よりもたらされ、地域に根付いていった信仰と、１年間の地域の防火と息災を祈る人々の想いが込められており、祭壇を設け幕が引かれた常夜燈での祭礼に、本市の東海道の歴史文化の一端としての歴史的風致が形成されている。

(4)東海道沿いの主な祭礼

古代より人々の往来の多かった東海道では、古くから道沿いに集落ができ、社寺が建ち、祭礼が行われてきた。そして人々の往来が積み重ねられ、様々な文化が伝えられ地元の祭礼に融合し継承されている。

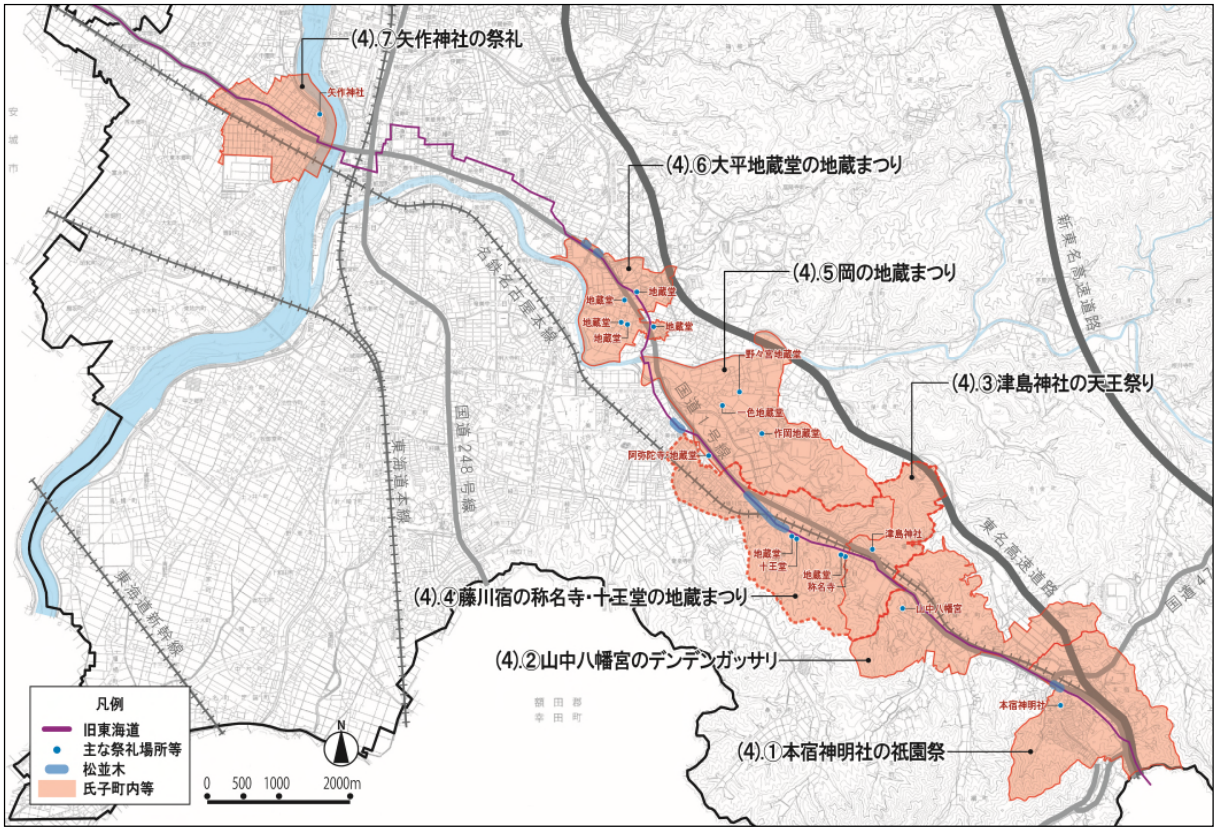


図2-2-19　東海道沿いの主な祭礼等

①本宿神明社の祇園祭

ア.本宿と本宿神明社の由来

本宿は、本市の東海道東の出入口にあたり、旧東海道、国道１号、東名高速道路、名古屋鉄道が束となり、古今とも東西交通の要衝となっている。元宿とも書いたそうで、古代の山綱郷（やまつなごう）は、この地域も含み山綱駅家があったということからこのような地名になったのではないかといわれている。本宿陣屋跡があり、江戸時代にはこの付近 12 か村の代官の置かれた所である。山の神を祀るテイチン（帝鎮）講[4]等の古くからの民俗行事も多く残されている。

図2-2-20　本宿神明社

[4] 鉢地町で、収穫後の旧暦 11 月第２申の日に行われる山の神祭り。３歳以上の男が参加し、注連縄等を作り、荒神の森の神木へ参る。

中世以降、室町幕府６代将軍足利義教（あしかがよしのり）の祈願所とされる法蔵寺を中心にまちなみが形成された。法蔵寺は東海道に接する場所に位置しているため、江戸時代には多くの参詣者が訪れた。家康公学問所の寺伝もあり、82 石余の朱印寺院となり幕府からの庇護厚く、参勤交代の大名も駕籠（かご）から降りて参詣したとされる。社伝によると、本宿神明社は至徳２年（1385）将軍足利義満の時、龍芸和尚が二村山法蔵寺と号し、堂中に祭祀していた皇大神を今の地に遷し、村民の産土神として社殿を建立し崇敬したとある。現在の社殿は大正２年（1913）に建立され、祭神は天照皇大神で、秋葉社、稲荷社を合祀し、津島社、琴平社を境内社として祀っている。

イ.祇園祭の歴史

本宿神明社では、境内社である津島社の祇園祭（天王祭）が７月第４日曜日に行われる。祭りの起源は今から 250 年程前の江戸時代に、本宿村や近村で伝染病が流行したが、牛頭天王を祀っていた立場（たてば）（東町）では病人がなく、牛頭天王のおかげだとうわさが広まり、本宿村中心の西木竹（きたけ）に社を建て祀るようになったとされる。古くは「ちょうちん祭り」と呼ばれ、御輿とちょうちん行列のみであったものが、大正の中頃から昭和初期になると、飾り付けをした荷車に子供が乗って、笛や太鼓を鳴らすようになり、花火ややぐらを担いで東海道を練り歩くようになった。山車（だし）は４氏子町に各１基ある。当初の山車は立場の東町だけであったが、栄町は昭和 10 年（1935）に、戦後になって西町は昭和 25 年（1950）に、中町は昭和 27 年（1952）にと、順次、氏子町ごとに造られた。東町の山車は伊勢湾台風時に壊滅し、現在の山車は、昭和 63 年（1987）に再建されたものである。

図2-2-21　本宿神明社祇園祭の山車巡行

ウ.現在の祇園祭

祭礼当日は、午後３時より津島社前で氏子による発輿式の後出立し、旧東海道や新町各町８つの御旅所・お立宮（たちぐう）を移動する。午後５時過ぎの宵祭渡御（とぎょ）では、先頭町の山車に続き、御輿渡御の行列が高張（たかはり）（提灯）、十二張２本、梵天（花笠）２本、白丁（はくちょう）（御輿と榊持ち）で並び、他の山車の列が繰り出す。西町の御旅所、栄町のお立宮のそれぞれの地点で神事と舞踊りを奉納する。東町の法蔵寺前に到着すると御輿は法蔵寺境内へ

図2-2-22　祇園祭のお立宮前の神事

入り、踊りを奉納する。出発地点は西町又は東町で毎年入れ替わる。十二張、梵天の竿先にはススキの葉を飾る。お立宮は、秋葉山常夜燈の前に祭壇をしつらえ、６月 30 日の大祓(迎神祭)から９月中頃(送神祭)までの夏の暑い時期に分社として立てられる。ここは、火の見櫓、本宿村道路元標が集中し、旧本宿村役場が建てられた本宿の中心地である。午後８時過ぎに山車は各町へ、御輿は津島社へ帰還渡御する。以前は境内で行われていた花火は、現在本宿陣屋代官屋敷前が煙火場となり、宵闇を染める手筒花火が奉納され祭りは華やかに終了する。

地域の氏子が連携しながら、古くからの祭礼に竿燈(かんとう)行列、山車渡御を加え発展させながら伝えられてきた姿が見られる祭りである。

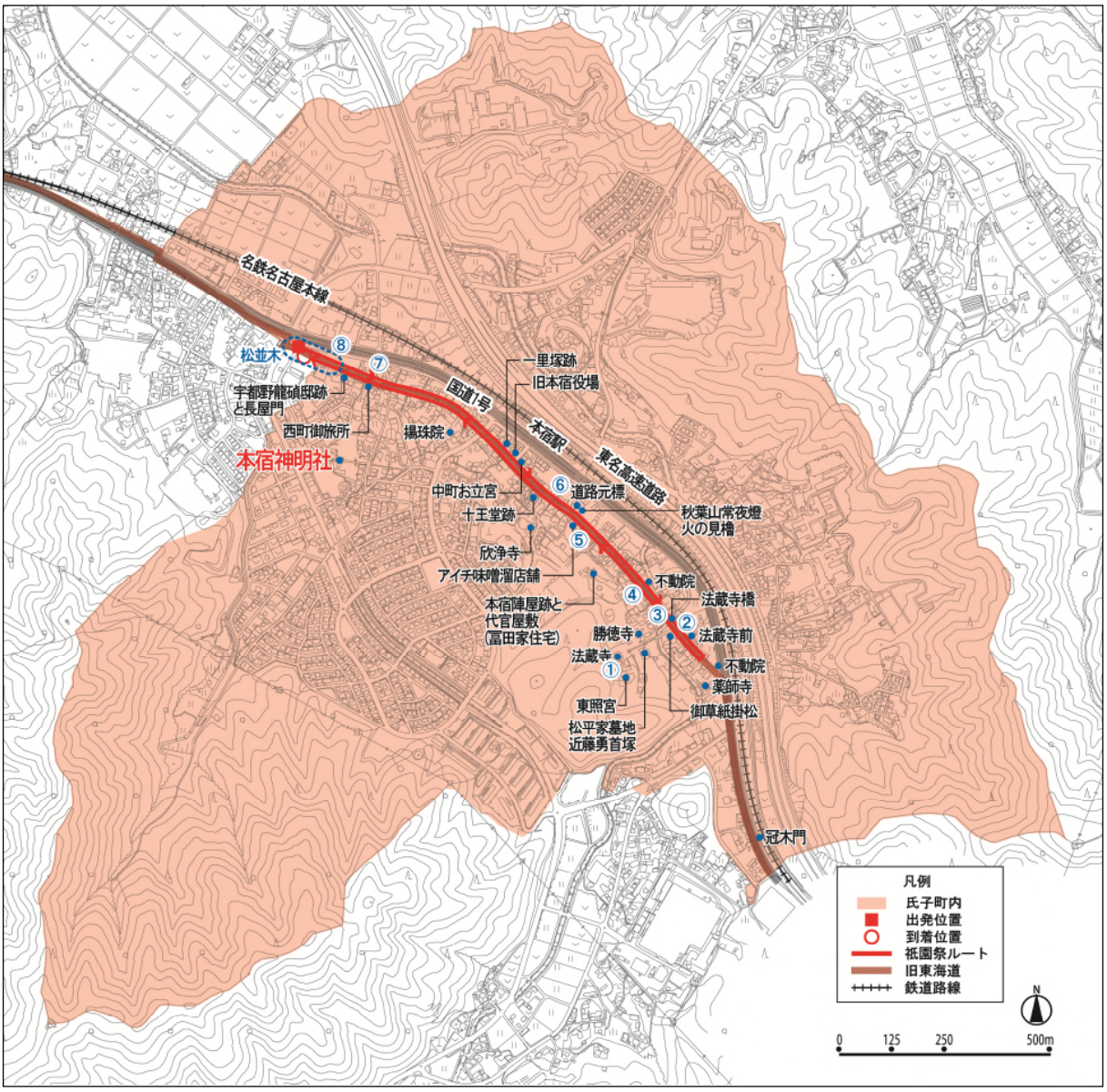


図2-2-23　本宿神明社の祇園祭の山車巡行図と市街地の状況

図2-2-24　周辺市街地の景観

②山中八幡宮のデンデンガッサリ

ア.舞木と山中八幡宮の由来

山中八幡宮は、岡崎市の東部、国道１号沿いの舞木町地内の丘陵地にある。山中八幡宮は、寛永４年(1627)の『山中八幡宮記』によれば、文武天皇３年(699)秋、当地に創建された稲前(いなさき)神社で始めて「供物の礼」が行われたことに始まるとある。さらに永禄６年(1563)三河一向一揆に追われた家康公が、社地の鳩ケ窟(はとがくつ)といわれる洞窟に身を隠し、一命を救われたといい、慶長８年(1603)家康公朱印状で150石を寄進された。祭神は応神天皇、比咩大神、息長足姫命。多数の棟札が所蔵されており、現在の本殿が再建されたのは延宝７年(1679)で、安永５年(1776)に修復とある。拝殿は寛政13年(1801)に再建され、文化12年(1815)には、本殿の屋根替えを行っている。参道には常夜燈と正面参道入口の鳥居の横にはクスノキの巨樹がそそり立ち、背景の社叢林とともに、神社境内としての壮厳な雰囲気を醸し出している。

図2-2-25　山中八幡宮の社叢

図2-2-26　山中八幡宮境内

イ.デンデンガッサリの由来

デンデンガッサリは、毎年正月３日、正式には山中八幡宮の御田植祭として行われる。田遊びの歌詞の始めに「デーンデーンガッサリヤー」という詞（ことば）があるので、「デンデンガッサリ」と呼ばれるようになった。その年の稲作の豊作を予祝するために、田作りの過程を模倣的に演技する「田遊び」である。東海地方に多く分布し、特に田遊びが単純で伝承されている例が三河地方に多く、三河国三之宮である猿投（さなげ）神社の貞和５年(1349)『年中祭礼記』に「田遊」が登場する。デンデンガッサリの起源は室町時代といわれている。現在は、正月３日の午後２時から拝殿で行われるが、昭和初期までは旧暦正月３日の夜に行われていた。

図2-2-27　デンデンガッサリ　稲刈り

図2-2-28　デンデンガッサリ　牛

例祭の準備は、昭和 47 年(1972)に設立されたデンデンガッサリ保存会により、12 月 30 日に社務所で行われ、祭りに使われる 60 キログラムの大鏡餅やお供えの餅が作られる。もち米は八幡宮周囲に広がる田で実ったものを使用する。

ウ.現在のデンデンガッサリ

デンデンガッサリの構成は大別すると「前歌」「後歌」「せりふ」「所作」の４部に分けられる。奉仕者が全員そろうと、まず神官が祝詞（のりと）を奉納する。終わると太鼓の周囲に立ち、太鼓を乱打すると、「ヤヤヤヤヤヤヤー」と言いながら足踏みで「田ごね」の所作をする。次いで、「デーンデーンガッサリヤー」と前歌に入る。歌の間中、太鼓は規則正しく叩かれる。歌が終わると「弁当」となり、櫃（ひつ）から祭りに奉仕する人と参拝者全員にしゃもじで１口ずつ御飯が配られる。人々はそれを手のひらで受け取り、口に入れる。「弁当」が終わり、再び前歌・後歌が歌われる。歌が終わるとせりふとなり、神前に飾られていた大鏡餅を田に見立てた太鼓の上にのせ、天気の良いことと稲の出来栄えをほめ、氏子中の地名を呼び上げる。全員で「ザーラザラ」と声を揃えて鎌に見立てたお供え餅を手に稲刈りの所作をする。この後に登場する牛の準備ができたかどうかを尋ねた後で、縄であんだ角を頭につけた牛役が四つん這いになって、収穫した稲穂(大鏡餅)を背に載せて太鼓の周りを回る。重さに耐えかねた牛が倒れると、人々は「丈夫な牛でも倒れるほどの豊作だ」と言って、喜び合う。牛が神前から姿を消した後、鏡餅は手頃な大きさに切られ、見物人に対して餅投げが行われる。この餅を

食べると一年間かぜをひかないという言い伝えがある。

街道に沿った集落と田園風景の中に、古来より守られてきた社叢林を背景に常夜燈と朱色の鳥居が建つ中、氏子らによるデンデンガッサリの大太鼓の音が響き渡り人々が五穀豊穣を願う古式ゆかしい風景である。

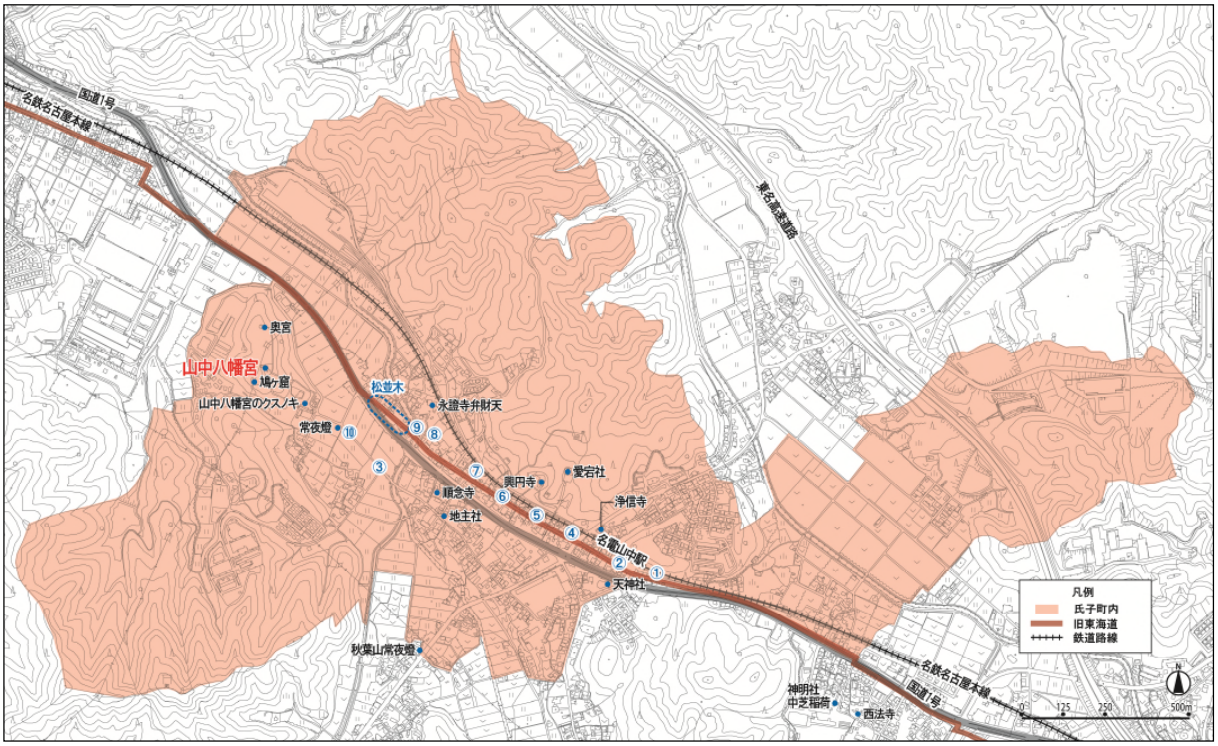


図2-2-29　山中八幡宮デンデンガッサリと市街地の状況

図2-2-30　周辺市街地の景観

③津島神社の天王祭り

ア.市場と津島神社の由来

かつて藤川宿であった市場町には、現在も街道沿いに社寺や伝統様式の歴史的な建造物が数多く建ち並ぶ。中でも、市場町の津島神社は、藤川宿の加宿市場村の氏神であり、「牛頭天王宮」と呼ばれていた。本殿は牛乗（うしのり）山を背に今もかわらず町を見守っており、藤川宿の歴史を今に伝える重要な建造物である。祭神は牛頭天王。社伝によれば元文３年(1738)創建、延享５年(1748)社殿を修理とある。

図2-2-31　津島神社祭礼のお立宮

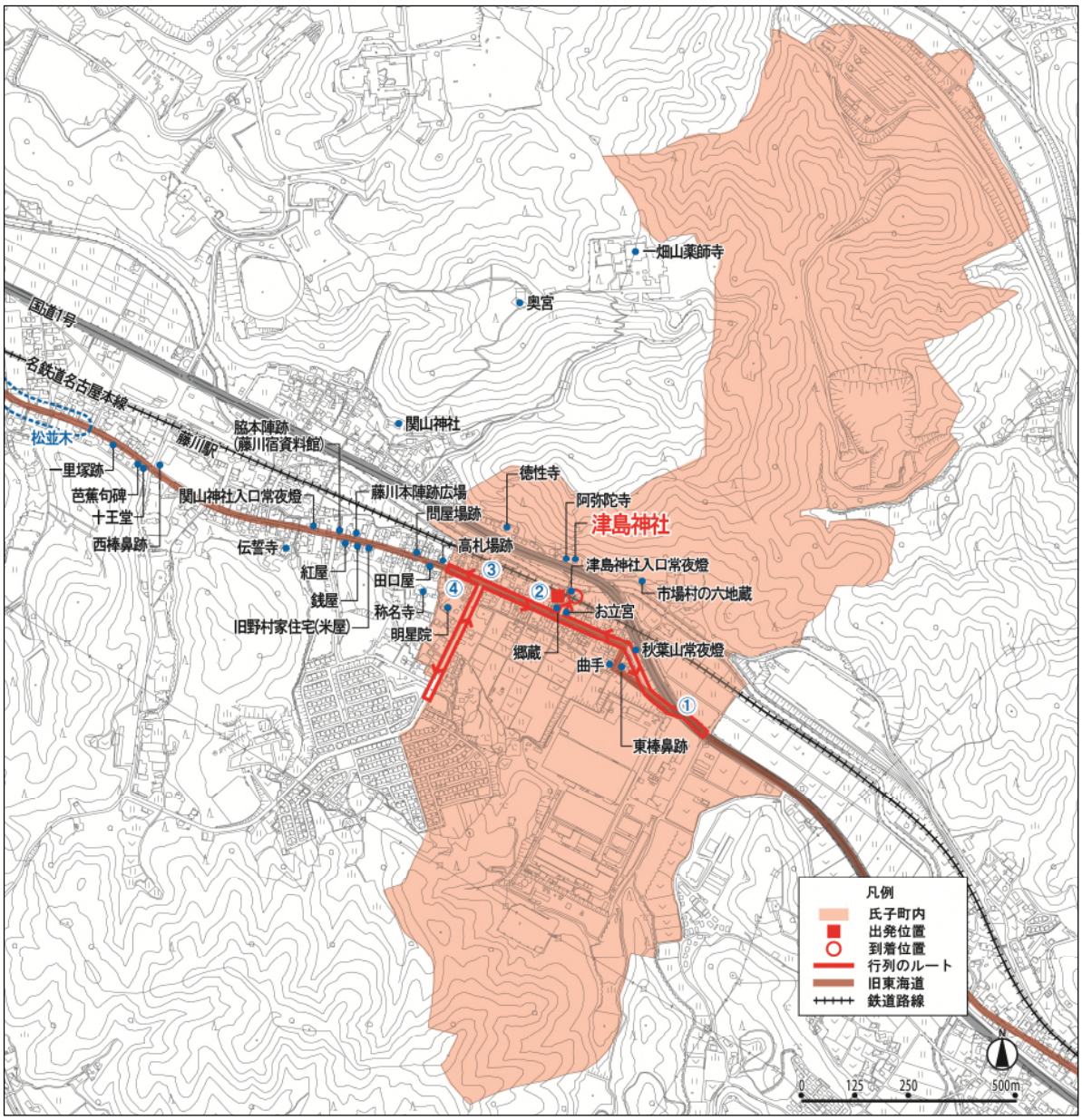


図2-2-32　津島神社の天王祭りの御輿渡御・竿燈行列の巡行図と市街地の状況

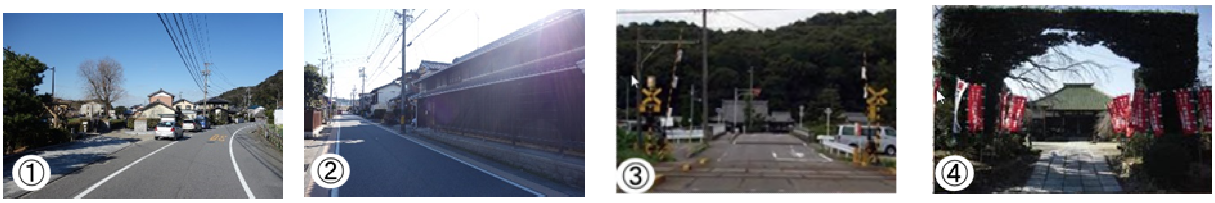


図2-2-33　周辺市街地の景観

イ.天王祭りの歴史

天王祭りは氏子らにより毎年７月第２土曜日に行われ、夏病み防止と虫送りの意味が含まれている。社伝によれば天王祭りに使用する渡御の神輿は、慶安年間(1648～1651)に現在地に加宿移転した際に隣町の山中八幡宮より移されたものと伝えられ、山中八幡宮の祭礼でもこの御輿が使われることから少なくともこの頃には始められたと考えられる。

ウ.現在の天王祭り

図2-2-34　津島神社の竿燈行列の巡行

津島神社(津島市)の御札を年行事が受けに行き、同じく藤川宿を構成していた隣町の藤川町の明星院に７日間宿をし、お立宮(たちみや)に 75 日間納めた後、本殿へ納める日が宵祭り日である。旧東海道からの参道入口の常夜燈脇に幟を立て、お立宮と呼ばれる祠を祀り、雄竹注連で囲む。その例祭当夜に行われる神事として、竿燈行列(通称「ちょうちんまつり」)がある。神輿渡御の行列の前後に高張、十二張の竿燈が加わり、ほの暗くなる午後７時頃より提灯に明かりを灯し、氏子町の人々が藤川宿であった東海道中を厳かに巡行する。行列は市場町東外れの国道１号の御旅所まで進みそこで祝詞があげられる。

高張６本、十二張 12 本にそろって灯火が入れられたさまは、赤い提灯が夕暮れ深まった街道沿いのまちなみの夜景に映え、夏の祭りにふさわしい素朴な美しさを感じさせる。

④藤川宿の称名寺・十王堂の地蔵まつり

地蔵まつりは、「地蔵盆」「地蔵会(じぞうえ)」とも呼ばれ、地蔵菩薩の縁日である旧暦７月 24 日辺りに信徒らが地蔵に供物・灯明を供え、仏名を唱えたりする行事である。地蔵菩薩は平安時代末期から六道で苦しむ衆生の救済仏として京都を中心に信仰され始め、中世には子どもを守る仏として信仰を集めた。地蔵まつりの信仰は江戸時代前期に複数の記録がある京都及び近畿地方で盛んであったものが、東海道を通じて広がったとみられる。道祖神信仰と結びついた路傍や街角のお地蔵さん、いわゆる「✔地蔵」が対象で、子どもの幸福を祈る民間信仰である。

ア.称名寺の地蔵まつり

図2-2-35　称名寺の地蔵堂と鐘楼

称名寺は、藤川宿の中心部の市場町との境の藤川町にある浄土宗西山深草派の寺。永禄 11 年(1568)に藤川村内「王子ヶ入」の赤山大明神(現関山神社)西南の「川向」に法蔵寺教翁洞慧の隠居寺として開創された。慶長６年(1601)に伊奈忠次黒印状で寺領３石を拝領した。寺伝によれば、寛文２年(1662)に、三河代官鳥山牛之助の指示で、東海道が宿内で南方に変更される際に街道沿いより奥まった現在地に移転した。『東海道宿村大概帳』に、藤川宿には旅籠が少ないため、興円寺・阿弥陀寺・徳性寺とともに旅籠の代行をしたことが記されている。街道から入る参道を抜けると境内が開け、左手にある鐘楼の脇に慶応２年(1866)に地域の女人講により造立された延命子安地蔵像を祀る堂があり、正面には寛文２年(1662)建立の本堂が建つ。

称名寺の延命子安地蔵まつりは、寺伝によれば慶応２年(1866)の地蔵像が祀られた頃には始められ、毎年８月 24 日に行われる。昭和 60 年(1985)に地蔵まつりを実施する地蔵会が地域の人と共に発足し活動が行われている。現在の地蔵まつりは、当日、朝８時より近隣の檀家・信徒と藤川小学校区を中心とした藤川宿周辺の小中学生の子ども達が集まり、お堂の清掃や準備が行われる。日中は、白色の七如来の旗７本がつるされた本堂内で元禄８年(1695)に祀られた地蔵尊像への祈願会が行われる。境内では餅投げや縁日の出店も出され賑わう。夕方になると地蔵堂の前で住職の読経により揃ってお参りをする。その後、境内にござを敷き皆で夕食をとり、子ども達は花火を行う。翌日の片付けに参加する子どもは、寺におこもりをする。３世代にわたる参加があり、地蔵まつりが地域と世代をつなぐ行事となっている。

イ.十王堂の地蔵まつり

図2-2-36　藤川宿の十王堂

十王堂は、藤川町の一里塚跡近くの東海道に面して建てられている。堂内の中央には緋の衣をまとった地蔵菩薩立像が安置され、その両脇に十人の王の像が並ぶ。作成年はいずれも宝永７年(1710)。堂の屋根は、かつては寄棟であったが、昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風により破損し、現在の切妻に改修している。

十王堂本尊の阿弥陀如来尊前では、字一里山の十数軒の講仲間により毎年８月 24 日に近い

土曜日に、地蔵まつり（地蔵盆施餓鬼会）が行われている。年番が本尊に紙の物相旗（施餓鬼の旗）の串数本を刺し、生米を載せたナス等で施餓鬼棚を設け、境内の地蔵堂に果物等を飾る。称名寺の住職を呼び、十王堂内で地蔵盆施餓鬼会が勤められ、その後外に出て地蔵堂前でお参りが行われる。地蔵像はやや大型の坐像で、台座に文化10年（1813）の銘が刻まれているため、少なくともこの頃より地蔵まつりが続いていると考えられる。

図2-2-37　藤川宿の称名寺・十王堂の地蔵まつりと市街地の状況

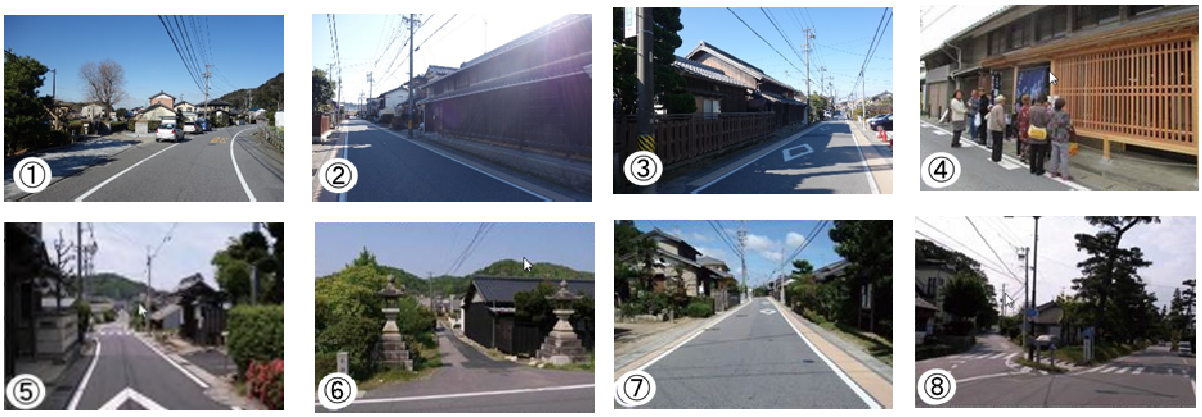


図2-2-38　周辺市街地の景観

⑤岡の地蔵まつり

ア.岡と阿弥陀寺の由来

岡町は、東海道と乙川が近接する地域であり、丸山古墳群と丸山廃寺が連なる対岸にあたる。中世には鎌倉街道の宿として作岡（つくりおか）宿があり、現在も岡町字作岡の地名が残されている。また、天正 13 年(1585)の家康公上洛時の宿所(岡御殿)となった岡城跡もある交通の要衝に開けた町である。近世には、岡町の神馬崎（かんばさき）に東海道藤川宿と岡崎宿間の立場が置かれていた。

阿弥陀寺は貞享２年(1685)に創建された浄土宗寺院である。明治時代以降に尼僧寺となっている。現在の本堂は昭和５年(1930)に建てられた。東海道に面する門前の地蔵堂には、弘法大師、馬頭観音と共に「慶応元年(1865)子供中」と台座銘のある地蔵像が祀られている。

イ.岡の地蔵まつり

岡町の神馬崎辺りでは、旧東海道が拡幅されて現在の国道１号となっており、現在も東海道を挟み「神馬崎」を含む字名が南北に広がる古い地割が残され、町内として人々の活動も一体で行われている。

神馬崎の地蔵まつりは各町内会等の人々により毎年８月 24 日に近い土曜日に行われる。小学生の子どもたちがお参りの１週間ほど前に「南無阿弥陀仏」と書いた習字紙を笹につけ、道沿いに立てていく。お供えの線香やお金も集めて回る。当日は、地蔵堂前に提灯を飾りお供えをし、阿弥陀寺の尼僧の読経に合わせ子どもたちがお参りをする。寺伝によれば戦前より行われ、昭和 30 年(1955)頃には男児のみが参加しておこもりも行われていたが、20 年ほど前から宿泊

図2-2-39　阿弥陀寺と地蔵堂

図2-2-40　岡町野々宮の地蔵堂

は行われなくなり、近年では女児も参加している。祭礼後にはお供えの菓子等が子ども達に配られる。

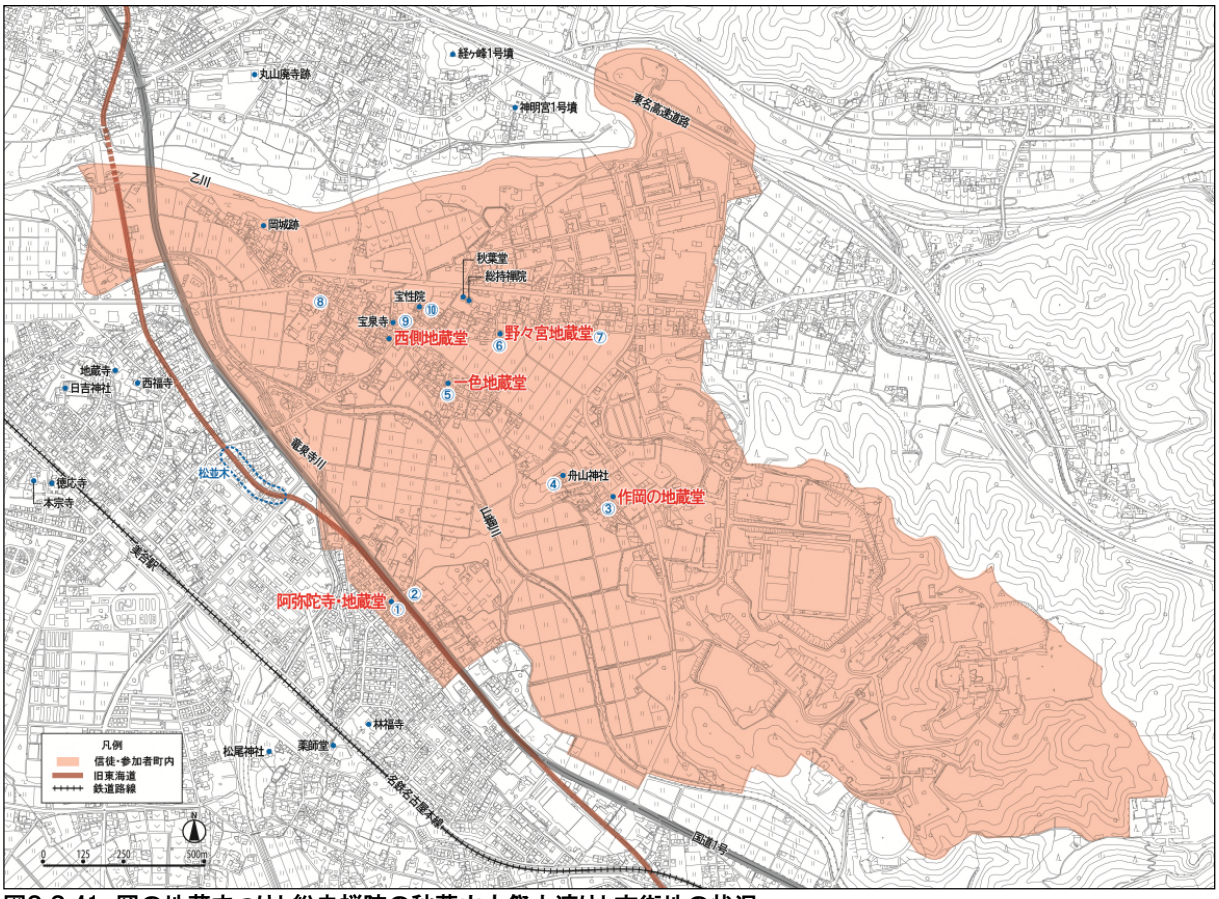


図2-2-41　岡の地蔵まつりと総寺禅院の秋葉山大祭火渡りと市街地の状況

図2-2-42　周辺市街地の景観

岡町の西側、野々宮、一色（いっしき）、作岡でも各集落の辻に立つ地蔵堂で地蔵祭りが町内会等により毎年行われている。西側地区では、田植え時期の５月の水路清掃後に、文化２年(1805)銘の馬頭観音と地蔵像の祀られる地蔵堂へお参りが行われる。野々宮地区では地蔵祭り独自の世話役があり、昭和３年(1928)に子供連により建てられた地蔵尊の祭りは大人も多く集まる行事となっている。一色地区では、慶応２年(1866)銘のある地蔵尊に彩色が施される。作岡地区では宿となる家が世話役を一手に引き受け、子ども達が集まり昼食をとる。どの地蔵祭りにも阿弥陀寺の尼僧が読経に招かれ、街道沿いの寺院と各地区とがつながりを持っている。

集落の子ども達と街道を行き交う人々を見守り続ける各地域の地蔵に、子ども達が集い感謝する行事が変わらずに続けられている。

⑥大平地蔵堂の地蔵まつり

ア.大平と大平一里塚・地蔵堂の由来

大平町は、江戸時代、大岡裁きで著名な大岡越前守忠相（ただすけ）が大名となり治めた西大平藩に当たり、陣屋跡がある。東海道沿いには市内で唯一現存する一里塚が往時の姿を伝えている。市内の一里塚は、東より本宿(本宿町字一里山)、藤川(藤川町字一里山)、大平(大平町字岡田)、矢作(矢作町矢作橋西詰)にあった。慶長９年(1604)に江戸日本橋を起点に１里(約４キロメートル)ごとの道標として設置され、旅行者の道程の目印になるとともに、夏には木陰で旅人が休息できるように配慮され、ひとときの憩いの場でもあった。榎が植えられ、緑陰を供する風情を保ち、現在も東海道を歩く見学者の道標ともなっている。地元では清掃や草刈り、そして目の前のお堂の管理等を行っている。

図2-2-43　大平一里塚

旧東海道を挟んで一里塚の向かい側に地蔵尊を祀った大平西町の地蔵堂がある。町では江戸後期の建立と伝わり、一里塚の前にあったものを史跡整備に伴い昭和13年(1938)に現在地へ移築した。堂内の一体は地域の子ども達の無事成長を見守る「子安地蔵」で、背後に長い年月を経て風化した地蔵像も大切に安置されている。もう一体は東海道を往来する人々の安全を守る「馬頭観音」である。

町内には、東海道を東へ行った薬師寺境内と、一里塚より南へ分岐した国道１号付近の辻に１棟と観音寺付近に２棟の地蔵堂がありそれぞれ地蔵まつりが行われている。

イ.大平の地蔵まつり

大平西町の「地蔵まつり」は、昭和 13 年(1938)より地蔵堂が一里塚向かいに移築された現在地で行われ、現在は町内の子ども会の感謝の心を込めた奉仕活動として毎年６月第１日曜日に行われている。前日に青々とした笹を 600 本切り出し、小学生の子ども達が「交通安全」「家内安全」と書いた紙と折紙をつるし笹を飾りつける。当日は、朝から帽子と前掛けを新しくした地蔵尊にお供えをし、観音寺の尼僧の読経と共にお勤めをする。その後、子ども達は近所の家々に笹を配り志を受けて回る。町の資料によれば、明治時代には行われていたと伝わり、昭和 30 年代に子どもから子どもに受け継がれる行事となり、まつりの日が近づくと、近くを流れる大平川(乙川)へ行き、良い音のする石を探し合い、当日は地蔵堂の前に筵(むしろ)を敷き、往来の人々に向かって「おローソクは一丁こころざしであがーります」「チン、チン」と、大平川(乙川)で拾ってきた石を叩いた。

図2-2-44　大平西町の地蔵堂と常夜燈

図2-2-45　大平辻中の地蔵堂

大平辻中(おおひらつじなか)でも、観音寺の尼僧を招き子ども達が３つの地蔵堂にお参りをする。大平東町では、薬師寺境内の地蔵堂で７月第１日曜日に地蔵まつりを行う。決められた大きさの半紙に延命地蔵尊の姿絵を赤と緑で押して竹に付け、川沿いなどに立てる。またこの竹飾りを子ども達が鉦を鳴らしながら近所に配って回る。

現在も、この伝統行事は子ども会の奉仕活動として受け継がれているほか、常時、仏花が絶えることなく供えられていて、歴史的な街道の遺構や建造物等と次代を担う若者が地域の伝統行事を受け継ぐ姿とが相まって、昔ながらの集落の一体感を感じさせる雰囲気を作り上げている。

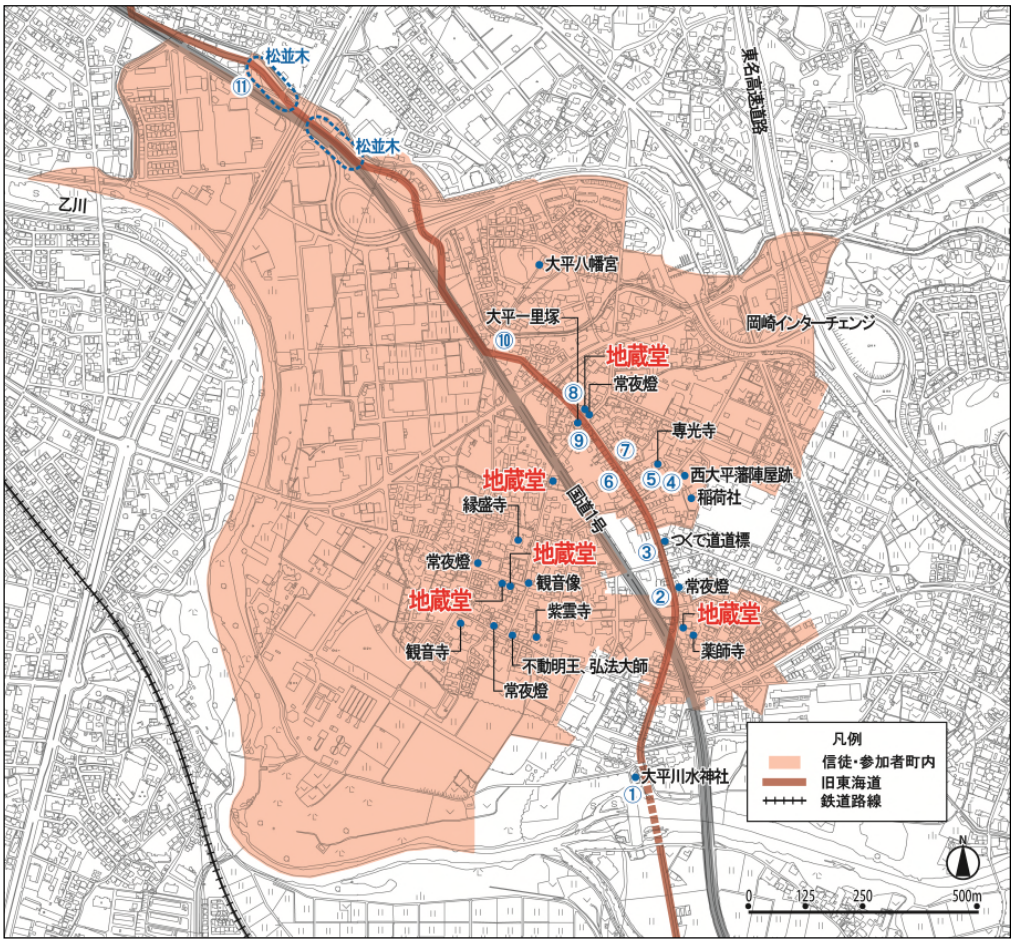


図2-2-46　大平一里塚・地蔵堂と市街地の状況

図2-2-47　周辺市街地の景観

⑦矢作神社の祭礼

ア.矢作と矢作神社の由来

矢作町の矢作神社には、「矢作」の地名の由来とされる日本武尊（やまとたけるのみこと）伝承がある竹藪が残り、主祭神は素盞嗚命（すさのおのみこと）。

図2-2-48　矢作神社

伝説では、「東征の折通りかかった、日本武尊に住民が、川の東に住む賊に苦しめられていることを訴えた。日本武尊に命ぜられた矢作部（やはぎべ）たちは矢を作ろうとするが、竹の生えている川の中州まで行けない。突然一匹の蝶が人の姿となり竹を切り取ってきてくれた。矢作部たちは１万本の矢を作り武尊は軍神素盞嗚尊（ぐんしんすさのおのみこと）を祀り戦勝を祈願し、賊（ぞく）を滅ぼした。それ以来、神社は矢作神社と呼ばれた」とされる。

応安３年～永和元年（1370～1375）のころ兵火にかかり烏有（うゆう）に帰し、天文年間（1532～1554）に岡崎城主松平広忠が祠を今の字祇園に再建したが、天正年間（1573～1591）の堤防決潰により流失したため、神殿を宝珠稲荷に合祀された。棟札より社殿を延宝３年（1675）に建立し、宝暦 12 年（1762）に本殿、天明５年（1785）に拝殿を再建していることが分かる。近世には「牛頭天王」（享和２年（1802）の村差出帳）と呼ばれ、神社下の土場（どば）（舟着き場）を天王土場と称する。近世の矢作橋架け換えの時、諸大名や普請奉行は当社に「矢作橋杭打ち図」「矢作橋設計図」等の絵馬（市有形民俗文化財）を奉納し工事成功を祈願している。その他水運業者等の絵馬の奉納が多い。

イ.祭礼の歴史

矢作神社の祭礼は、以前は７月中旬に行う夏祭りで、現在は毎年 10 月１・２日が祭礼日である。祇園祭と同様に山車が加わる。

図2-2-49　矢作神社祭礼山車巡行

西中之切（矢作三区）の山車は、旧来の簡素なものから天保 10 年（1839）に新造され、前棚に記された墨書から、山車は６月に完成し、彫刻師は名古屋の瀬川治助（せがわじすけ）（重定か重光）父子、総頭領は岡崎城下材木町の大山庄八として、木地（きじ）師や箔置師等岡崎の職人集団で作り上げていることがわかる。また、東中之切（矢作二区）の山車は、文化 11 年（1814）作（天保 11 年（1840）塗り上げ彩色）で、墨書銘より天保 11 年（1840）に上山が大山庄八により築造され、さらに、文久元年（1861）改造時とみられる前棚の檀箱（だんばこ）彫物に「瀬

川」「重光」の印型彫が認められ、より壮麗な姿へと改修が重ねられたことがうかがえる。いずれの山車も江戸時代後期に作られ、この頃には祭りが始まったと考えられる。

各山車の正面と上段拝など随所に施された彫刻には全てに金箔が押され、丸柱等は黒漆塗りで、幕の金銀色糸による刺繍と相まって華麗荘厳である。戦時中は額田地区の桜井寺町に三区の飾り物等を疎開させ、車輪等は岡崎空襲で焼失したものの戦後復元し、大切に保管をしている。

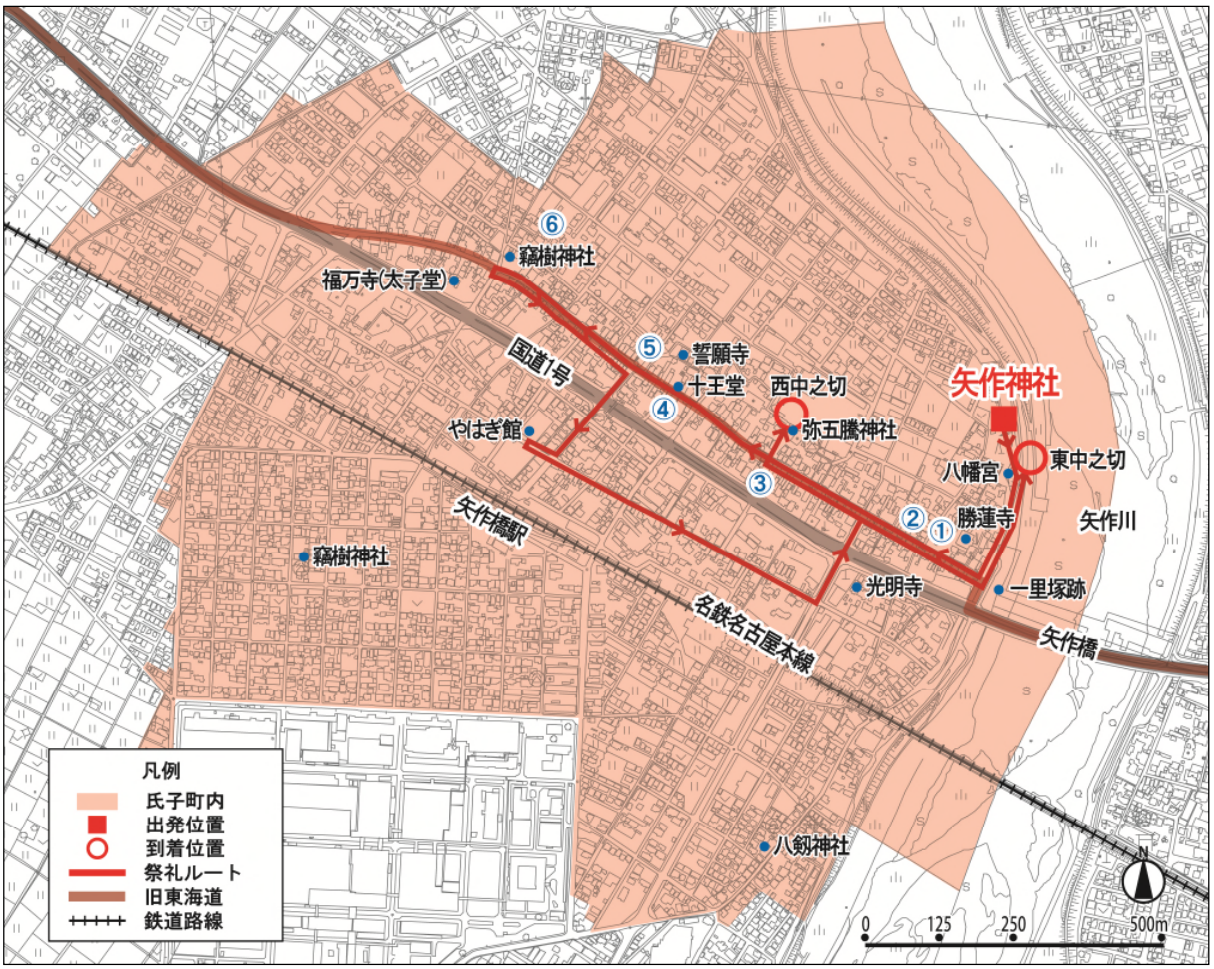


図2-2-50　矢作神社の祭礼山車の巡行図と市街地の状況

図2-2-51　周辺市街地の景観

ウ.現在の祭礼

10月１・２日の祭礼日には、江戸時代末期に各氏子町の人々により作られた祭礼山車２台が山車蔵の前で飾り付けられる。祭礼が週末となる年は２日目に山車の巡行がある。矢作川沿いの矢作神社より出立し、氏子町の人々が曳く華麗な２階建ての山車が秋空の下、旧東海道のまちなみを進む。花の撓[5]で有名な誓願寺門前を過ぎ『三河国内神名帳』（平安時代中期以降編さん）に名のある竊樹神社で折り返し、国道１号を超えて矢作橋駅前まで曳きまわす。

道中には山車上の囃子方のゆらりと練る様を表した文化文政以来とされる曲を始め、道行きの緩急に合わせた囃子が鳴り響く。華麗荘厳な山車と囃子がよく合う晴れやかな祭りである。

(5)東海道沿いのその他の歴史及び伝統を反映した人々の活動等

祭礼のほか、東海道を特徴づける松並木、一里塚、常夜燈又は道標など現存する史跡も多く残されており、これらを保存する活動が現在のまちづくり活動も含めて、地域の人々によって行われ続けている。

①松並木と地域団体による保護活動

市を東西に貫く東海道沿いには、近世に街道を往来する旅人を日差しや寒風から守るため、マツが植えられた。市内の東海道松並木は、東端の本宿町から西へ、デンデンガッサリの行われる舞木町、37番目の宿場町「藤川宿」のまちなみが残る藤川町、美合町、岡崎宿東の東名高速道路岡崎インターチェンジ付近の大平町に残され、旧東海道の位置と風情を伝えている。岡崎でみられる松並木のマツは「みかわくろまつ」と名付けられ、昭和46年(1971)に市民投票によって岡崎市の木に決定された。人々によって大切に手入れされている松並木は、夏季には緑と木陰が目を涼ませ、冬季には菰が巻かれて、往時の東海道の風情や季節を感じさせる風物詩となっている。

図2-2-52　藤川のまつ並木(市天然記念物)

図2-2-53　藤川のまつ並木の清掃活動

藤川のまつ並木は、旧東海道の両側約１キロ

[5] ５月８日熱田神宮の豊年祭の田所、畠所に行き、豊年絵図を受けてツクリモノを再現し、近郊の農家が見に来て作物の豊凶を占う。「おためし」ともいう。

メートルの間に約90本のクロマツが道の両側に並び、往時の旅の風情を漂わせ見応えがある。昭和38年(1963)頃から、藤川の老人クラブや地域のまちづくりを行う有志らが並木の保護活動を行い、最近は藤花荘(障がい者支援施設)利用者の協力で熱心に清掃活動が行われている。

②藤川宿と地域団体による現在のまちづくり活動

藤川は、慶長6年(1601)に家康公により伝馬朱印状が発給され宿場町として栄えた。当初はおよそ5町45間(約630メートル)の小さな宿場であったが、人馬の不足を補うために慶安元年(1648)に東隣の舞木村字市場を加宿し、9町20間(約1,020メートル)と規模を大きくした。幕末の資料によると、本陣と脇本陣が各1軒、旅籠屋が36軒あった。脇本陣跡の東海道に面した棟門は、享保4年(1719)の大火の後に再建され、江戸時代の名残を留め歴史を物語る貴重な遺構となっている。格子のある町家も各所に見られ、街道の風景をつくっている。中でも旧野村家住宅(米屋)は、江戸後期の建築と推定され、藤川宿内で最大級の規模の町家建築である。内部は日本の伝統建築である堅牢な柱や梁の構造で、広い土間などに当時の暮らしを十分に偲ぶことができる。松並木の清掃保護活動等の有志らの保護活動は、その後、地域のまちづくり活動に発展し、現在、「藤川まちづくり協議会」により宿場文化財の積極的な保全・活用の取組みを始め、街道沿いの社寺や歴史的な建造物を背景に地域の歴史や文化を後世に伝えるための様々な活動が行われている。

図2-2-54　藤川宿資料館(脇本陣跡)

図2-2-55　旧野村家住宅(米屋)

藤川宿脇本陣跡には、平成2年(1990)に藤川宿資料館が建てられ、岡崎市指定文化財である高札(こうさつ)等が展示されている。江戸時代の参勤交代の大名を迎えた藤川宿本陣跡は、平成25年度(2013)に「藤川宿本陣跡広場」として整備された。裏手の石垣がよく残り国道1号、名鉄名古屋本線からも眺められる。また、藤川宿は、古くから穂が紫色をした珍しい「むらさき麦」が栽培されており、江戸時代の『東海道名所記』に記録されているほか、十王堂境内に「爰(ここ)も三河 むらさき麦の かきつはた」と詠まれた松尾芭蕉の句碑がある。

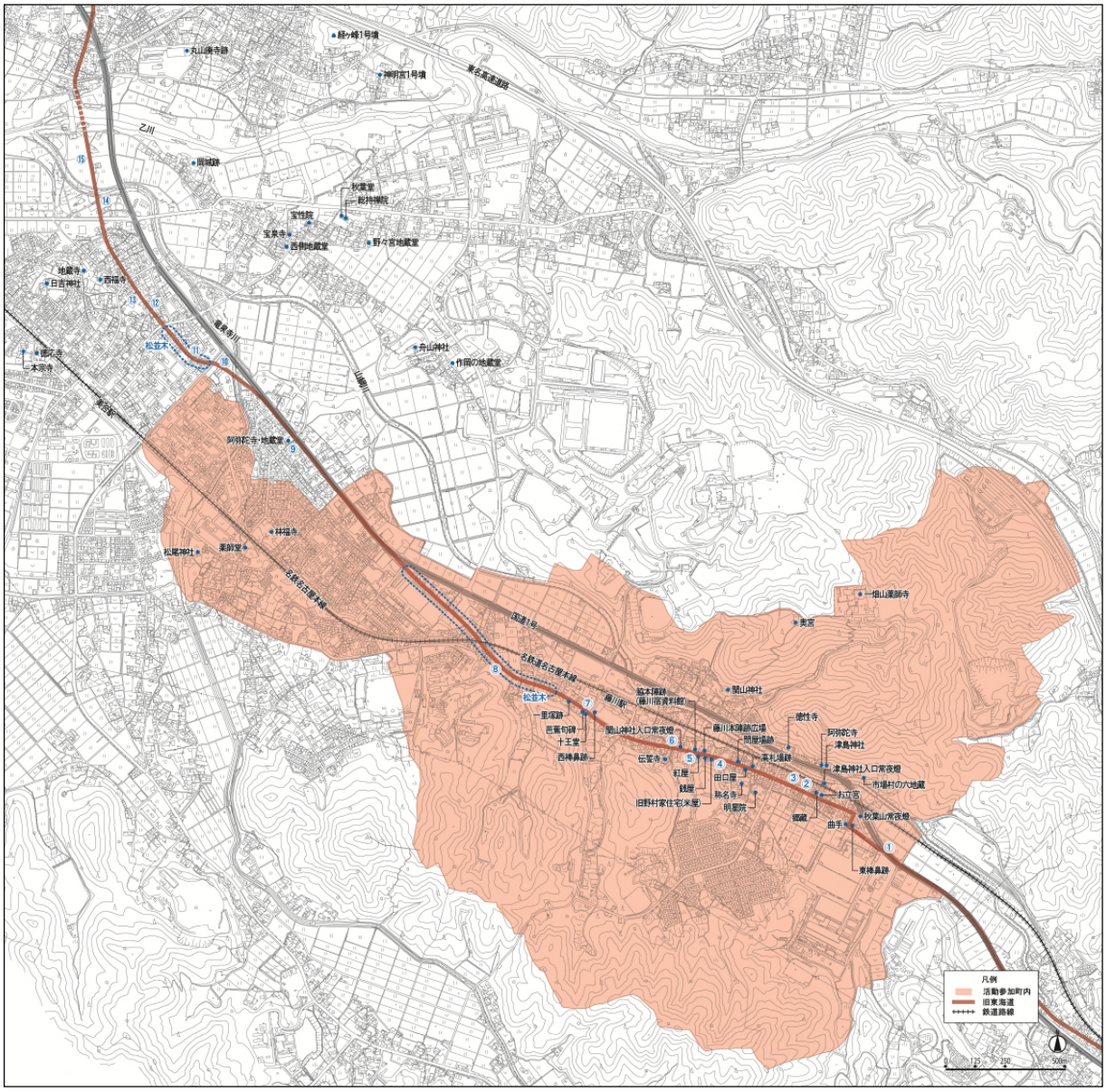


図2-2-56　松並木と地域団体による保護活動と市街地の状況

図2-2-57　周辺市街地の景観

藤川宿を抜けると、道が二手に分かれ、右が旧東海道藤川の松並木、左が土呂（ところ）（現在の福岡町）・吉良（西尾市）方面へと続く吉良道（きらみち）となっている。分岐地点には吉良道の道標（文化 11 年（1814）建立）が立ち、古くからこの辺りが交通の結節点として大きな意味をもっていたことがわかる。

図2-2-58　吉良道道標

(6)おわりに

市域を南東から北西へ縦断する東海道は、市域を通る古くからの街道の中でも、ことに市民に親しまれている歴史ある道である。東海道を通って人や物、情報が往来し、新しい文化が本市域にもたらされた。現在、幹線道路としての役割は並行する国道１号が担っているが、中心市街地を除いて、ほぼ東海道と並行して私鉄が敷設されたことから街道沿いの集落では

市街地化が進み、その中を通り抜けている東海道は、人々の生活道路として、今なおその往来は活発である。

東海道沿いの市街地においては、江戸時代に宿場等として栄えた歴史が現在の地域コミュニティを形成する上でも重要な役割を果たし、継承されている信仰行事等が地域コミュニティをさらに強固なものにしている。周囲に広がる山並み等を背景として、昔ながらの風情を備えた建造物が残る地区が続き、路傍には燈籠など石造物が点在し、街道沿いに残る古くから信仰を集めてきた社寺の歴史的な建造物と古くから伝わる信仰行事等の人々の活動が相まって、自然豊かで趣のある街道の面影を今に伝える良好な歴史的景観を形成している。

四季折々に町々で催される祭礼では、旧東海道を舞台に、ハレの日に揃いの法被等の装束に身を包んだ人々が工芸技術の集約された山車を力を合わせて曳き、また提灯を灯し厳かに行列をすすめている。ここには街道筋に生きる町衆の誇りと地域の人々のつながりが表れている。東海道を舞台とする歴史と伝統を伝え、三河の穏やかな文化の彩りを添え、風情を醸し出しているこれらの祭礼等と民俗的行事の光景は、本市の歴史文化の一端を象徴する歴史的風致の一つとなっている。

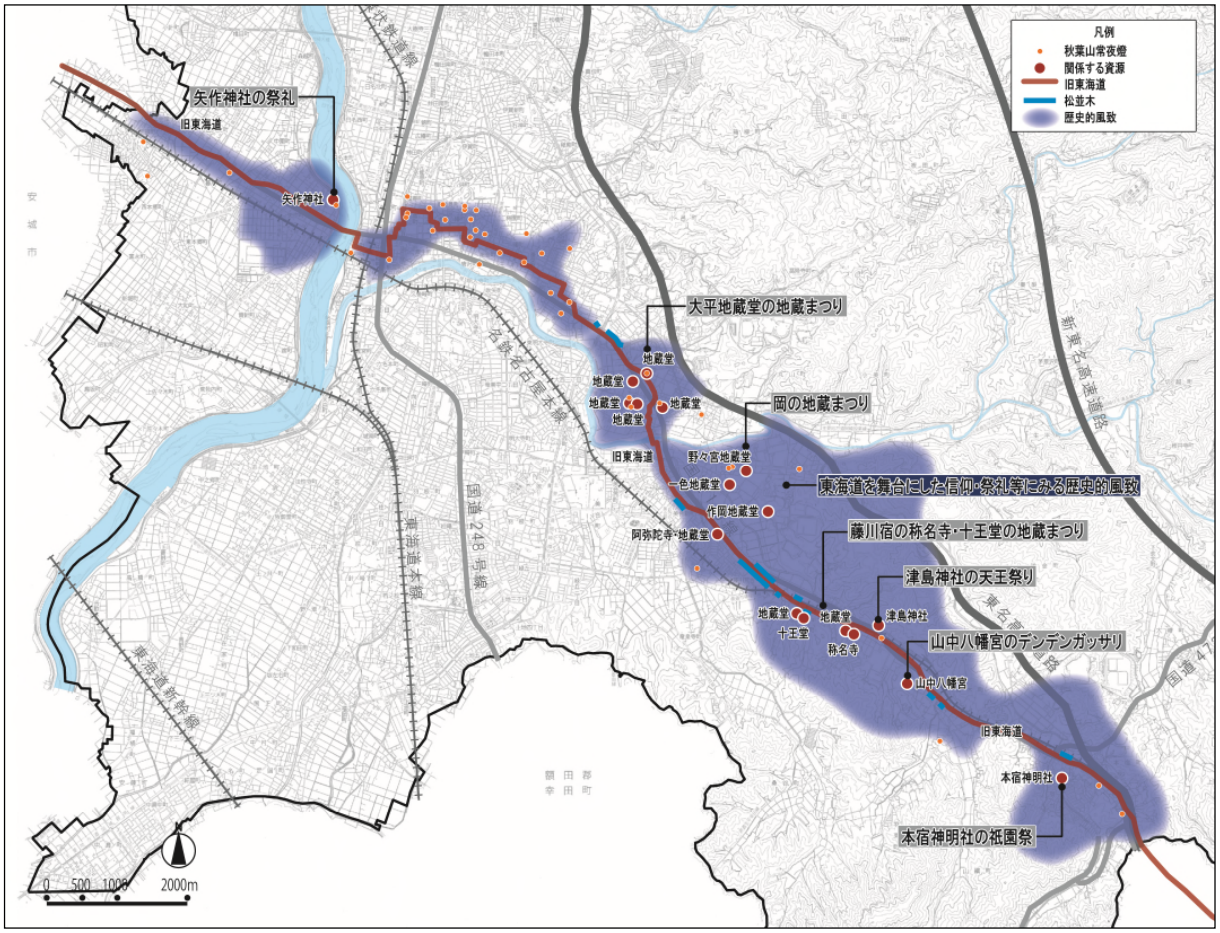


図2-2-59　東海道を舞台にした信仰・祭礼等にみる歴史的風致の範囲

藤川地区の教育活動

藤川小学校では、平成 13 年度(2001)の藤川宿開宿 400 年記念祭を機に、6年生が総合的な学習の時間に地域の題材である藤川宿を教材化した学習に取り組み、平成 21 年度(2009)には、学習内容をパネル化して旧東海道沿いに現存する町屋建築の歴史的建造物である旧野村家住宅(米屋)に常設展示した。平成 22 年度(2010)には、藤川地区内の大学である愛知産業大学の学生と連携して、学区の地図の立体模型の製作に取り組み、平成 23 年度(2011)は、「藤川ガイドになろう」という学習目標のもと、藤川宿を中心とした学区探検を繰り返し行い、その成果を「ガイドブック」、「缶バッチ」、「旧野村家住宅(米屋)のミニチュア模型」、「むらさき麦の食料品等商品化提案パネル」、「町屋屋号の表札」などにまとめた。このような総合学習を通して、藤川地区の児童は宿場町としての地域固有の歴史を学び、藤川まちづくり協議会などの地元団体と連携しながら、地区全体で積極的にまちづくりに参画していこうという風土が広がっている。

図2-2-60　総合学習(藤川ガイド)の様子

図2-2-61　総合学習(藤川ガイド)の様子